

第2章 船来山古墳群の概要と現状

1 既往の調査

調査履歴及び関連報告書等について、以下に整理する。

表 2-1 調査履歴および関連報告書等

時期	調査概要	関連報告書等
昭和4年	岐阜県の郷土史家・考古学者である小川栄一氏による研究 船来山西半分のエリア、白山神社を中心とした部分において古 墳分布の調査が行われた。 山頂から中腹にかけ、かなりの数の古墳が確認されている。	「郷土研究資料第1号」掲載 の古墳分布図
昭和42年	この年の7月8日におきた豪雨により、岐阜市側の宅造作業箇 所が崩れ、主尾根部が半壊の状態となったことから、木棺が偶 然に見つかった。そこで調査が実施され24号古墳の発見に至 った。 鏡、銅鏃、大刀、鉄剣、石釧、勾玉、管玉、ガラス玉などの出 土した豪華な副葬品は、東京国立博物館に収蔵されている。	
昭和63年	三重大学八賀晋教授（当時）指導の下、糸貫町教育委員会によ って分布調査が行われ、山全体に81基の古墳が確認された。	
平成5年～ 平成9年	ゴルフ場開発に伴う発掘調査のための試掘調査 （平成5年12月～平成7年3月） ゴルフ場開発におけるコース及び各種施設にともなう削平・整 地予定の部分において、古墳群の範囲、密度、他の遺構等の把 握を行った。 ゴルフ場開発に伴う発掘調査（平成7年4月～平成9年4月） 総面積およそ45,500m ² （字名「桑山」「郡府山」の一部）の範 囲で発掘調査を行った。 本巣市側では方形周溝墓1基、前期古墳6基、後期古墳155基 など数多くの遺構を発見し、全体で284基となった。	『船来山古墳群<本文編> <別冊編><別添図>』 （1999年10月、糸貫町教育 委員会・本巣町教育委員会）
平成6年4 月25日～7 月11日	富有柿の里施設整備に伴う発掘調査で、富有柿の里地点約 1,100m ² の範囲で実施された。 後期古墳（87・88・89・90号墳）4基と土坑墓2基、縄文時代 早期等、古墳時代以前に属する遺物が出土した。 裾野でも豊富な玉類をもつ古墳、「船来山型」ともいえる2mを 越える深い掘方をもつ本古墳群の構築方法などが示された。	『船来山古墳群富有柿の里地 点発掘調査報告書』 （1994年、糸貫町教育委員 会）
平成7年～ 平成9年	ゴルフ場開発に伴う発掘調査（岐阜市側） 岐阜西開発株式会社からの委託により岐阜市遺跡調査会およ び財団法人岐阜市教育文化振興事業団によって実施された。 周溝墓3基、前方後円墳1基のほか、圧倒的に多数の横穴式石 室を主体部に持つ後期古墳が48基確認された。	『船来山古墳群』 （2007年、岐阜西開発株式会 社・財団法人岐阜市教育文化 振興事業団）
平成21年 10月13日	東海環状自動車道建設に伴う地質調査（ボーリング）の立会調 査が実施された。 調査箇所は181号墳、182号墳に隣接しているが、古墳の墳丘 から外れていることを確認しボーリングが行われた。3m下まで 山土、4m下から岩盤、砂岩質の岩盤が8m下まで、その下9mま では亜炭がまじった層が堆積しており、明確な遺構、遺物は確 認できなかった。	『本巣市埋蔵文化財試掘・確 認調査報告書』 （平成18年度～21年度、本 巣市教育委員会）
平成19年 ～23年度	分布調査によって、新たに7基が発見されたが、5号墳と6号 墳が一つの前方後円墳であることが確かめられたため、山全体 で古墳の数は290基となった。	『本巣市詳細遺跡分布調査報 告書』（2012年、本巣市教育委 員会）
平成25年 ～	弥勒寺谷支群ほか未調査の前方後円墳を中心に詳細分布調査、 測量調査を実施している。 68号墳、81号墳、62号墳、5号墳、12号墳、67号墳、76号墳 の測量調査が岐阜農林高等学校の協力のもと順次実施され、船 来山古墳で圧倒的多数を占める後期古墳が築造される前の様 子が少しずつ明らかにされている。	『古代と未来のかけ橋 船来 山古墳群』（2015年3月、本 巣市教育委員会社会教育課）

2 船来山古墳群の概要

(1) 圧倒的な大古墳群

船来山は濃尾平野の縁に位置し、山頂からは濃尾平野を一望できる素晴らしい眺望の山である。東西約2km、南北約600mの独立丘陵で、山頂や中腹からは、養老山脈から名古屋方面まで見渡すことが出来る。また山麓よりやや南には古代の官道東山道が走り、大河川であった旧糸貫川が南北に流れるという交通の要所にある。

船来山古墳群の特徴は、圧倒的な古墳の数の多さである。船来山の尾根筋だけでなく、中腹や裾部に至るまで、古墳290基が確認されている。3世紀中頃から7世紀まで連綿と造営されており、東海地方では最大級の規模である。このように、長期間にわたり同一丘陵上に古墳が密集する事例は、岐阜県内では例がない。大阪府平尾山古墳群、一須賀古墳群、奈良県岩橋千塚古墳群、巨勢山古墳群、新沢千塚古墳群など、畿内周辺の古墳群と肩を並べる。

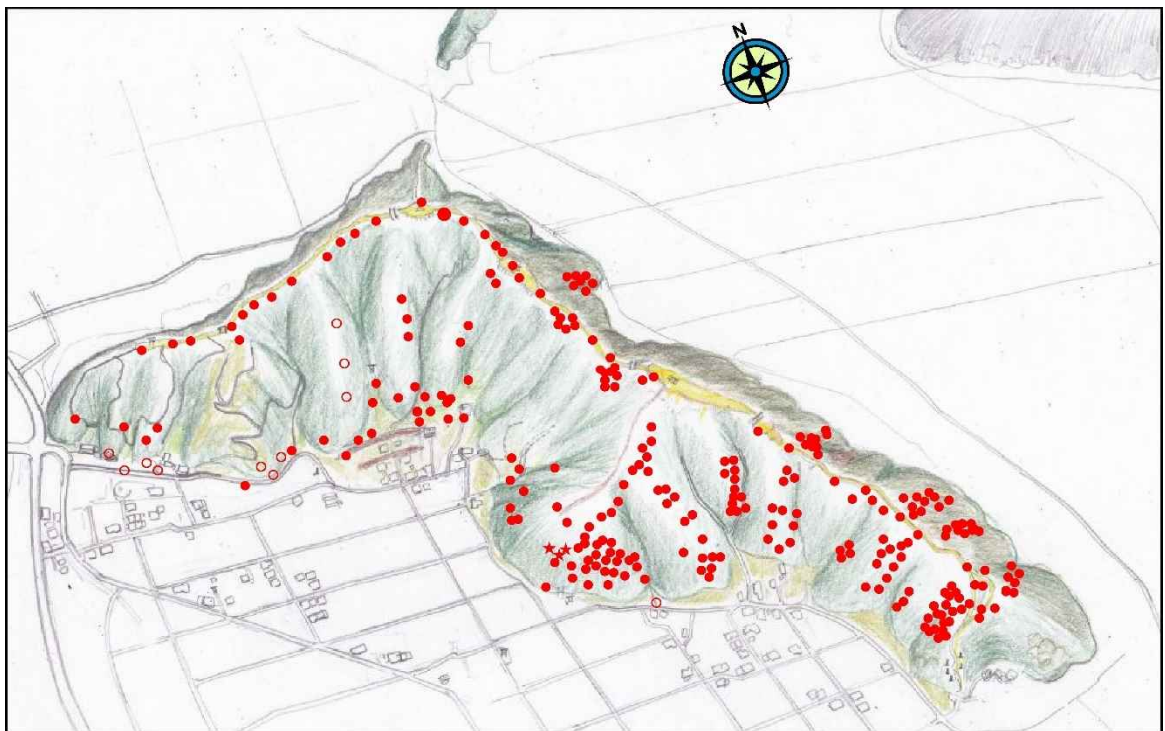


図2-1 船来山古墳群鳥瞰図（杉山新次郎画、2014年までの成果による）

(2) 古墳時代前期から後期に至る造営期間と石室の多様性

現在確認されている290基のうち、前期古墳（前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳）は20基、弥生時代終末期からの方形周溝墓、土坑墓も含めれば23基、中期古墳は3基、後期古墳は202基である。前期古墳は円形を基調とするだけでなく、方形を基調とするものも判明しつつあり、多様な様相を見せる。

一方で、古墳時代中期に入ると基数は激減し、築造場所も限定される。前期とはかなり異なる様相を見せる。尾根筋には古墳は築かれず、谷の入り口等に築かれる。

後期に入ると丘陵の中腹から裾部、さらに尾根筋に至るまで古墳が爆発的に造られるようになる。石室の形式は、初期は竪穴系横口式石室の系譜をひくものや、横穴式石室には両袖式・無袖式・片袖式、胴張を呈すもの・長方形を呈すものなど多様な形式が見られ、同一支群の中でも混在する様相で

ある。

290 基のうち、既に発掘調査された古墳は 216 基であり、全体の約 70%にものぼる。調査率の高さも、群を抜いている。既発掘調査時に、谷筋ごとに支群設定され、A 支群から T 支群までが設定されている。このうち本巢市側は、G 支群から T 支群である。これらの支群に該当しない未調査の地域にも、平成 25 年度から詳細分布調査をすすめている。ここでは、本巢市側の G 支群から T 支群と、春稲神社奥の院周辺の仮称春稲神社支群、弥勒寺周辺の仮称弥勒寺谷支群について整理する。

表 2-2 (1) 船来山古墳群の構成

支群名	概要	主要古墳
G 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 桑山と呼ばれた船来山東端にある支群で、山麓に智勝院がある。 ・ 前期古墳 3 基。前期古墳 26 号墳、27 号墳を契機として、周辺に後期古墳 27 基、竪穴住居跡 1 軒が確認されている。 ・ 横穴式石室には両袖式・無袖式、胴張の形態を示す石室など多様な石室が見つかった。 ・ 29 号墳からは、複環鏡板付轡をはじめとして、雲珠、辻金具などの馬具、鉄鏃、大刀、1106 点もの玉類など豊富な副葬品のほか、石室床面からは雲母片が出土した。 	26 号墳 27 号墳 29 号墳 133 号墳 169 号墳 170 号墳 211 号墳
H 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 後期古墳 16 基が確認されている。 ・ 後世の地形的な改変が著しい。 ・ 154 号墳では良好な状態で石棺（組合式石棺、チャート）が見つかり、大刀、弓飾金具、255 点もの玉類など豊富な副葬品が出土した。 	128 号墳 154 号墳
I 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 郡府山と呼ばれた一帯。前期古墳 1 基、後期古墳 6 基が確認されている。 ・ 後世の南部の削平で不明瞭な遺構が多い。 ・ 24 号墳は昭和 42 年（1967 年）に、主尾根部が半壊状態で見つかった。鏡、銅鏃、大刀、鉄剣、勾玉、管玉、ガラス玉など大変豪華な副葬品が出土し、直径約 20m、高さ 2.5m の円墳、割竹形木棺をもつ主体部と推測された。 ・ 156 号墳は大型の横穴式石室で、側壁は良好な状態で残されている。 	24 号墳 156 号墳
J 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 船来山古墳群のほぼ中央部で、主尾根部にあたる。 ・ 前期古墳 1 基、後期古墳 2 基が確認されている ・ 後の時代に、古墳の上に中世山城が築かれた。 ・ 前方後円墳 37 号墳からはヤリガンナが出土した。 	37 号墳
K 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東部 J 支群の南麓斜面にあたる。 ・ 後期古墳 12 基が確認されている。 ・ 33 号墳は背後に掘割を有する。 ・ 103 号墳からは須恵器、馬具、鉄鋤先、ミニチュア農耕具、銅釧、369 点もの玉類、石室床面からは雲母片が出土した。 	33 号墳 103 号墳 106 号墳
L 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・ J 支群の南部に伸びた主尾根上にあたる。 ・ 後期古墳 13 基が確認されている。 ・ 後世の柿畑による地形的な改変が著しい。 ・ 97 号墳からは刀装具・八窓鏝、鞘尻金具、銀飾金具、馬具、耳環などが出土した。 	97 号墳 110 号墳 121 号墳
M 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 八幡山と呼ばれた一帯から、南東方面へのびた主尾根部の南端にあたる。 ・ 後期古墳 11 基が確認されている。 ・ 145 号墳は、船来山古墳群の後期古墳の中でも、前期古墳 36 号墳を契機として、一番早い時期に築造された。 ・ 145 号墳は、7 世紀まで追葬され、鉄鏃 76 点のほか、刀装具・鏝、弓飾金具、623 点もの玉類、須恵器など豊富な副葬品のほか、石室床面からは雲母片が出土した。 ・ 173 号墳からは、銀空玉、銀耳環、178 号墳からは、970 点もの玉類など豊富な副葬品が出土した。 	36 号墳 145 号墳 173 号墳 174 号墳 178 号墳

表 2-2 (2) 船来山古墳群の構成

支群名	概要	主要古墳
N 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・八幡山と呼ばれた一帯から主尾根部へ至る場所で、M支群上部にあたる。 ・尾根上の最上部に前方後円墳 35 号墳があり、良好な状態で残されている。 ・22 号墳、140 号墳は、尾根上の前期古墳 35 号墳を契機として築造され、このほか後期古墳 9 基が確認されている。 ・後世の石材の抜き取りが著しいものが多いものの、141 号墳では水晶切子玉 17 点、水晶勾玉などの豊富な玉類が出土した。 ・142 号墳では、鉄鏃 53 点をはじめ、雲珠などの馬具、円頭柄頭、鐙といった刀装具等、豊富な副葬品が出土した。 	22 号墳 35 号墳 140 号墳 142 号墳 165 号墳
O 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・八幡山と呼ばれた船来山中央部一帯にあたり、濃尾平野に眺望の効く、本古墳群では最大の支群である。 ・3 世紀末の方形周溝墓のほか、後期古墳 38 基が確認されているが、5 世紀末から 7 世紀まで古墳が造り続けられた最長の造営期間の支群である。 ・竪穴系横口式石室、横穴式石室の両袖式・無袖式・片袖式、やや胴張のもの・長方形のものなど多様な石室が見られる。 ・岐阜県内で 5 基しか確認されていない赤彩古墳が、3 基（19 号墳、272 号墳、274 号墳）隣接して造られた。 ・赤彩古墳のうち 2 基（272 号墳、274 号墳）は竪穴系横口式石室の系譜をひく石室である。 ・赤彩古墳 19 号墳（無袖式）からは、中国大陸で作られたとの説がある雁木玉 2 個、赤彩古墳 272 号墳からはトンボ玉 23 個が出土した。 ・このほか 19 号墳からは鑿、ガラス丸玉、金銅空玉、銅空玉、150 号墳からは金耳環、金銅空玉 22 個、151 号墳からは銅丸玉、272 号墳からは銀耳環が出土している。 	16 号墳 19 号墳 58 号墳 101 号墳 147 号墳 149 号墳 151 号墳 166 号墳 264 号墳 266 号墳 271 号墳 272 号墳 274 号墳 275 号墳
P 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・主尾根の R 支群から、150m ほど南西に降りた主尾根の端部にあたり、後期古墳 1 期が確認されている。 ・72 号墳は地元では「宝山古墳」と呼ばれ、出土品とされる装飾須恵器が近隣で保管されている。 	72 号墳
Q 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・八幡山の尾根最長部から、主尾根の北方面へ一段下がったところにある。 ・前期古墳 98 号墳と、98 号墳を契機として周囲に後期古墳 11 基が確認されている。 ・墳長 39m の前方後円墳と推定される 98 号墳からは、全国で 17 番目となる方形板葺短甲が出土した。 ・後期古墳は地形的な改変や石材の抜き出しが多い。 ・後期古墳の本格的な造営は、他の支群に比べて遅いものの、191 号墳は 7 世紀に築造され、最終末の古墳である。 	98 号墳 191 号墳
R 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・船来山頂上部と八幡山頂上部のほぼ中間の主尾根上にあたる。 ・前期古墳 99 号墳と、99 号墳を契機として周囲に後期古墳 5 基が確認されている。前期古墳 99 号墳からはヤリガンナが出土した。 	99 号墳 186 号墳
S 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・通常古墳が見られない北麓に位置する。 ・109 号墳は竪穴系横口式石室の系譜であり、後期古墳の中でも早い時期に造営されている。 	109 号墳
T 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・竪穴系横口式石室の系譜をひく 87 号墳のほか、古墳時代初頭の土坑墓 2 基が見つかった。 	87 号墳 土坑墓
春稲神社 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 25 年度以降詳細分布調査が行われ、船来山頂上部から西方面に伸びる主尾根上に、少なくとも 4 基以上の前期古墳が確認された。 ・62 号墳は墳長約 40m の前方後方墳、67 号墳は 24m × 17m の方墳、76 号墳は墳長約 30m の前方後方墳の可能性があり、東部とは異なり方形を基調とした地域である可能性がある。 ・船来山古墳群初期形成時期の解明につながる支群である。 	62 号墳 67 号墳 76 号墳 64 号墳 （調査予定）
弥勒寺谷 支群	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 25 年度以降詳細分布調査が行われ、船来山頂上部の 5 号墳は、墳長約 65m の前方後円墳、首長墓クラス古墳であることが判明した。 ・81 号墳、68 号墳はいずれも円墳であることが確認された。81 号墳は南側に造出をもつ帆立貝形の古墳である可能性が高く、測量中に表採された埴輪片により、船来山では数少ない中期古墳の可能性が高くなった。 ・81 号墳の埴輪片は、淡輪技法の円筒埴輪片であることが判明し、岐阜県内における分布域の北限にあたるということが判明した。 	5 号墳 68 号墳 81 号墳

参考文献：『船来山古墳群』（1999 年糸貫町教育委員会、本巣町教育委員会）、一部、平成 27 年（2015）からの再検討の成果を含む。

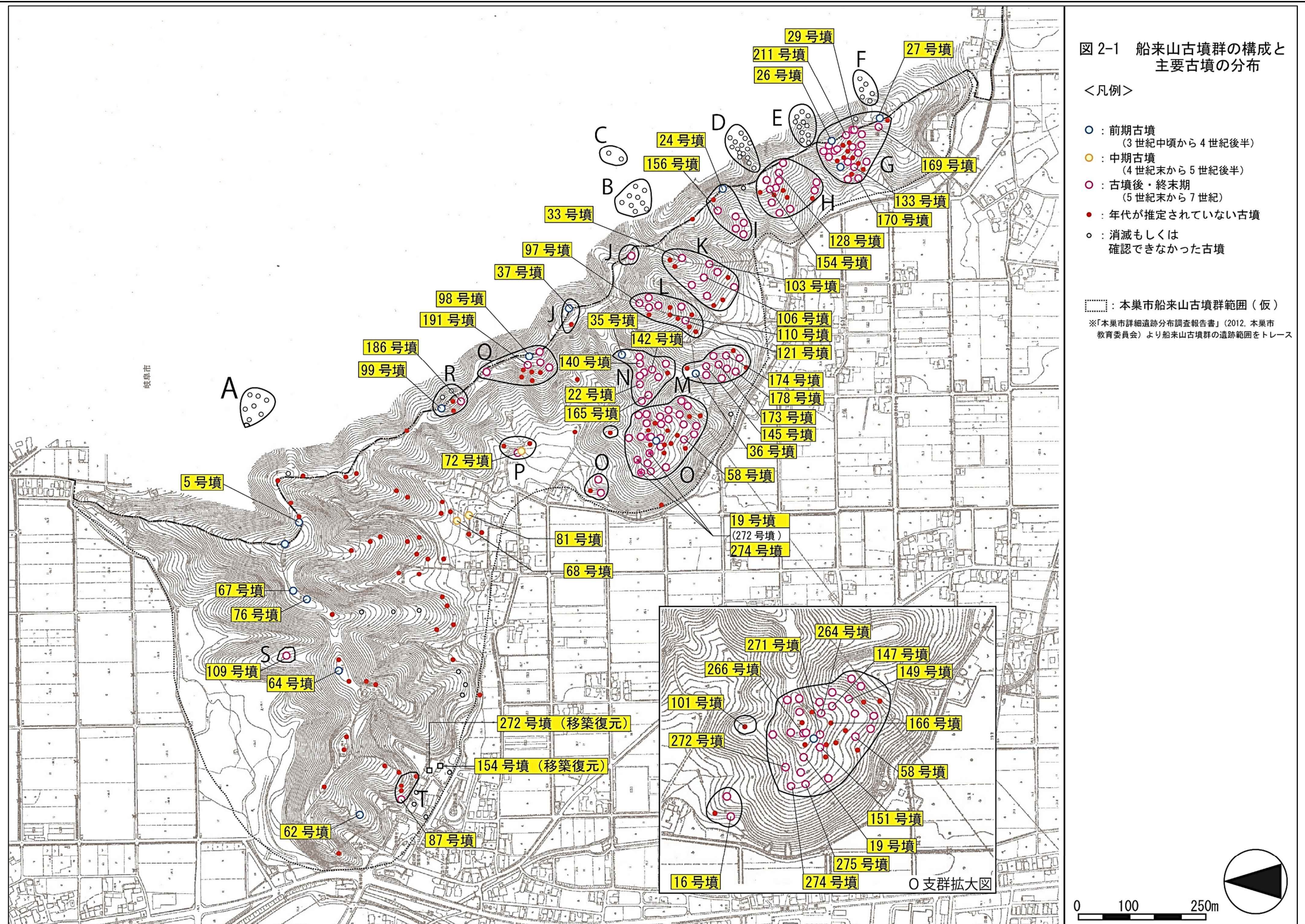


表 2-3 主要古墳の概要

		現状	特徴	時代	備考
G	26号墳	発掘	・墳長 43m の前方後円墳 ・複数の後期円墳が近接して築造 ・河原石の葺石を伴う	前期	墳丘上部削平
	27号墳	保存	・円墳 ・銅鏡出土	前期	
	29号墳	発掘	・横穴式石室 ・複環式板付嚢等の馬具出土	後期	
H	154号墳	発掘 移築復元	・横穴式石室、組合せ式の石棺 ・須恵器等がほぼ手付かずの状態出土 ・縞状の節理を持つチャートを利用して築造	後期	
I	24号墳	保存	・直径 20m の円墳 ・竪穴式、割竹形木棺 ・鏡、銅鏃、勾玉、管玉、ガラス玉、大刀等の豪華な副葬品（4世紀末のもの、東京国立博物館に収蔵） ・河原石の葺石を伴う	前期	盛土の一部残る
J	37号墳	発掘	・前方後方墳の可能性	前期	周辺 150m ² ほど削平された形跡（中世山城の痕跡か）
N	35号墳	保存	・前方後円墳の可能性 ・良好に残存	前期	
O	58号墳	発掘	・支群内では最も大きい ・円墳、墳長 10.5m の大規模な横穴式石室、両袖式 ・周溝、堅固な「堰堤」を伴う	後期	
	19号墳	発掘	・赤彩古墳 ・円墳、横穴式石室、無袖式 ・付近一帯の固い砂岩脈の巨大な岩塊をそのまま奥壁の鏡石に利用 ・周溝を伴う ・雁木玉、ガラス玉等の装身具出土	後期	一帯は良質な岩塊が露出し、古代から近代にかけて、格好の「石取場・石切場」であったと思われる
	272号墳	発掘 移築復元	・赤彩古墳 ・円墳、横穴式石室、竪穴系横口式石室 ・石室内全面にベンガラ塗布の痕跡 ・膨大な数の土器類やトンボ玉等の装身具出土、O支群では最も良好に遺物残存	後期	墳丘の盛土は遺存しない
	274号墳	発掘	・赤彩古墳 ・円墳、横穴式石室、竪穴系横口式石室 ・ガラス玉等の装身具出土	後期	
Q	98号墳	発掘	・墳長 39m の前方後円墳 ・ヤリガンナのほか、方形板革綴短甲等の武器・武具出土 ・複数の後期古墳が近接して築造	前期 4世紀後半	西部に柿畑の削平整地
R	99号墳	発掘	・木棺直葬 ・斧、槍、ヤリガンナ等の農工具出土 ・複数の後期古墳が近接して築造	前期	
弥勒寺谷	68号墳	保存	・円墳	中期	平成 25 年測量
	81号墳	保存	・帆立貝形古墳の可能性 ・淡輪技法の円筒埴輪片表彩	中期 5世紀後半	平成 25 年測量
	5号墳	保存	・墳長 65m の前方後円墳 ・河原石の葺石を伴う	前期後半～ 中期前半	南斜面に石積みで改変された平坦面あり 平成 26 年測量
春稻神社	67号墳	保存	・方墳の可能性 ・葺石を伴う	前期 4世紀	平成 27 年測量 測量範囲を樹林伐採
	76号墳	保存	・墳長 30m の前方後方墳の可能性 ・河原石の葺石を伴う	前期 4世紀	平成 27 年測量 測量範囲を樹林伐採
	64号墳	保存		前期	調査予定
	62号墳	保存	・墳長 40m 以上の前方後方墳の可能性 ・河原石の葺石を伴う	前期 4世紀	前方部は歩道により削られている可能性

参考文献：『船来山古墳群』（1999 年系貫町教育委員会、本巣町教育委員会）一部、平成 27 年（2015）からの再検討の成果を含む

(3) 船来山古墳群の変遷

船来山古墳群は、3世紀中頃から7世紀までの古墳時代を通じて古墳が築造されている。

ここでは古墳時代の前期から後期を全4期に分けて、その分布と特徴を整理する。

表2-4 古墳時代の区分

第1期	3世紀中頃から4世紀後半	前期古墳
第2期	4世紀末から5世紀後半	中期古墳
第3期	5世紀末から6世紀後半	後期古墳
第4期	6世紀末から7世紀	後・終末期古墳

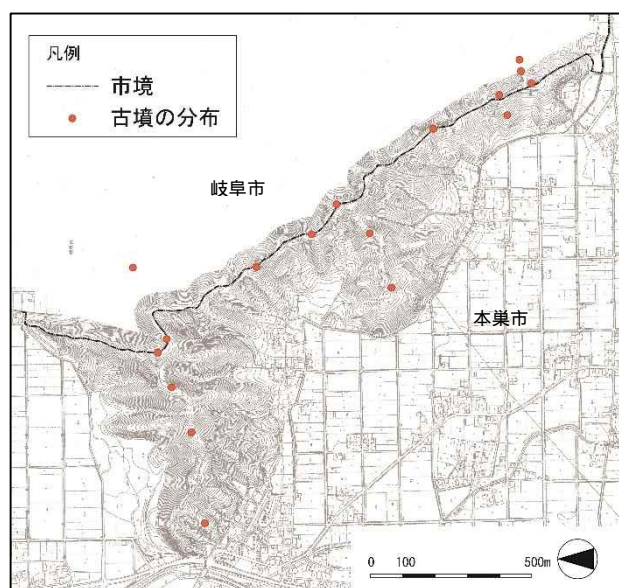
第1期

3世紀中頃からの方形周溝墓をはじめ、前方後円墳5号墳や墳長約40m以上の前方後円(方)墳62号墳など、大型の古墳が築かれた時代である。

船来山から郡府山にかけての山頂部と主尾根に築かれ、その後、各支尾根や中腹に展開していく。

西尾根では方墳・前方後方墳が、東尾根では円墳や前方後円墳が主に分布している。

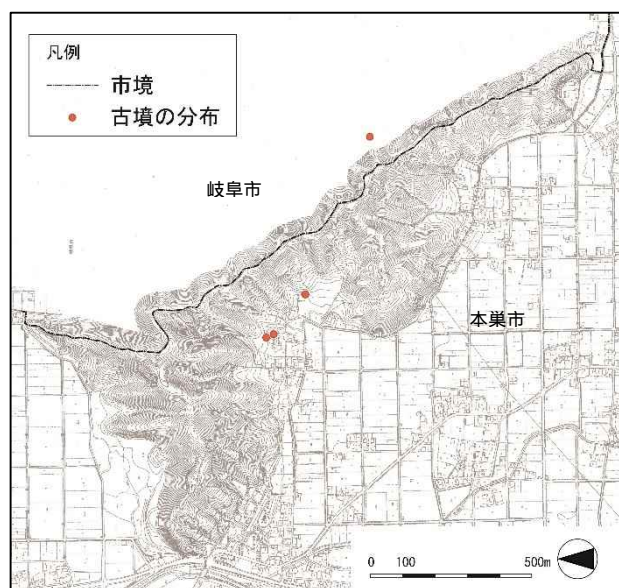
鉄鏃(98号墳)、鉄槍(99号墳)、方形板革綴短甲(98号墳)といった武具・武器類が出土している。



第2期

弥勒寺谷支群、81号墳は5世紀後半の築造の帆立貝形古墳である。

横穴式石室導入以前の古墳で、淡輪技法の円筒埴輪片(81号墳)が出土している。



第1期

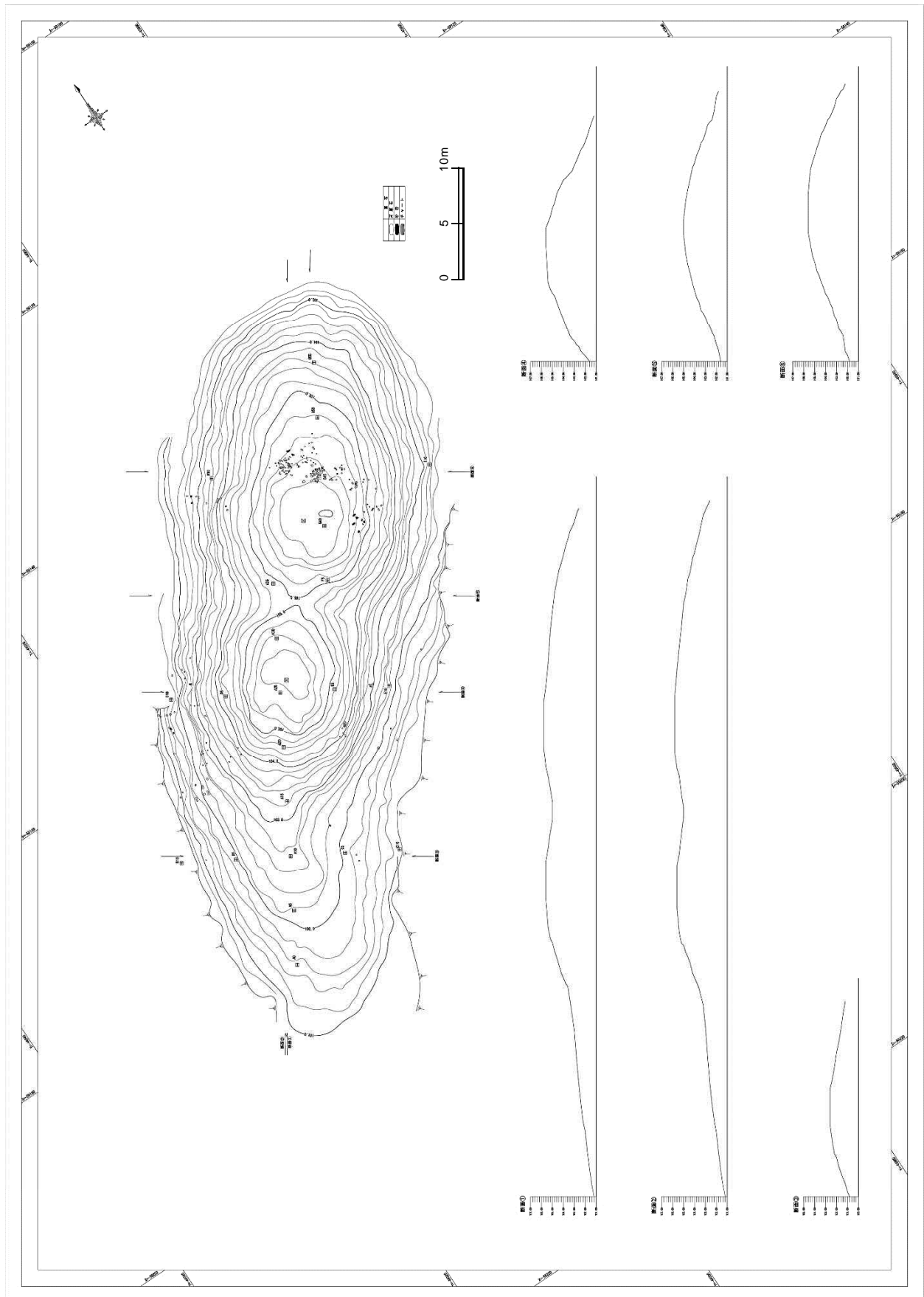


図 2-2 船来山 67 号墳と 76 号墳

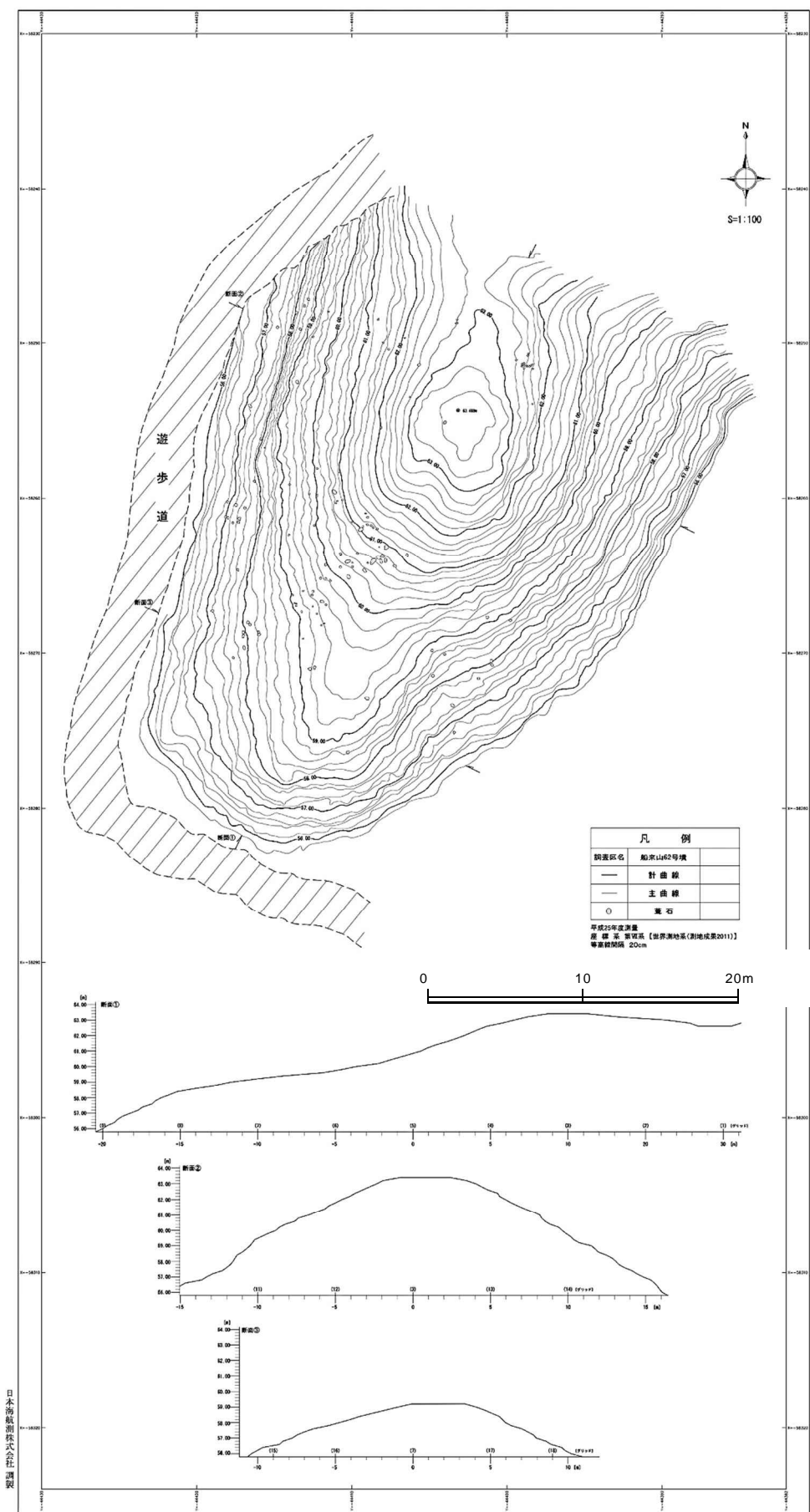


図 2-3 船来山 62 号墳



図2-5 船来山26号墳

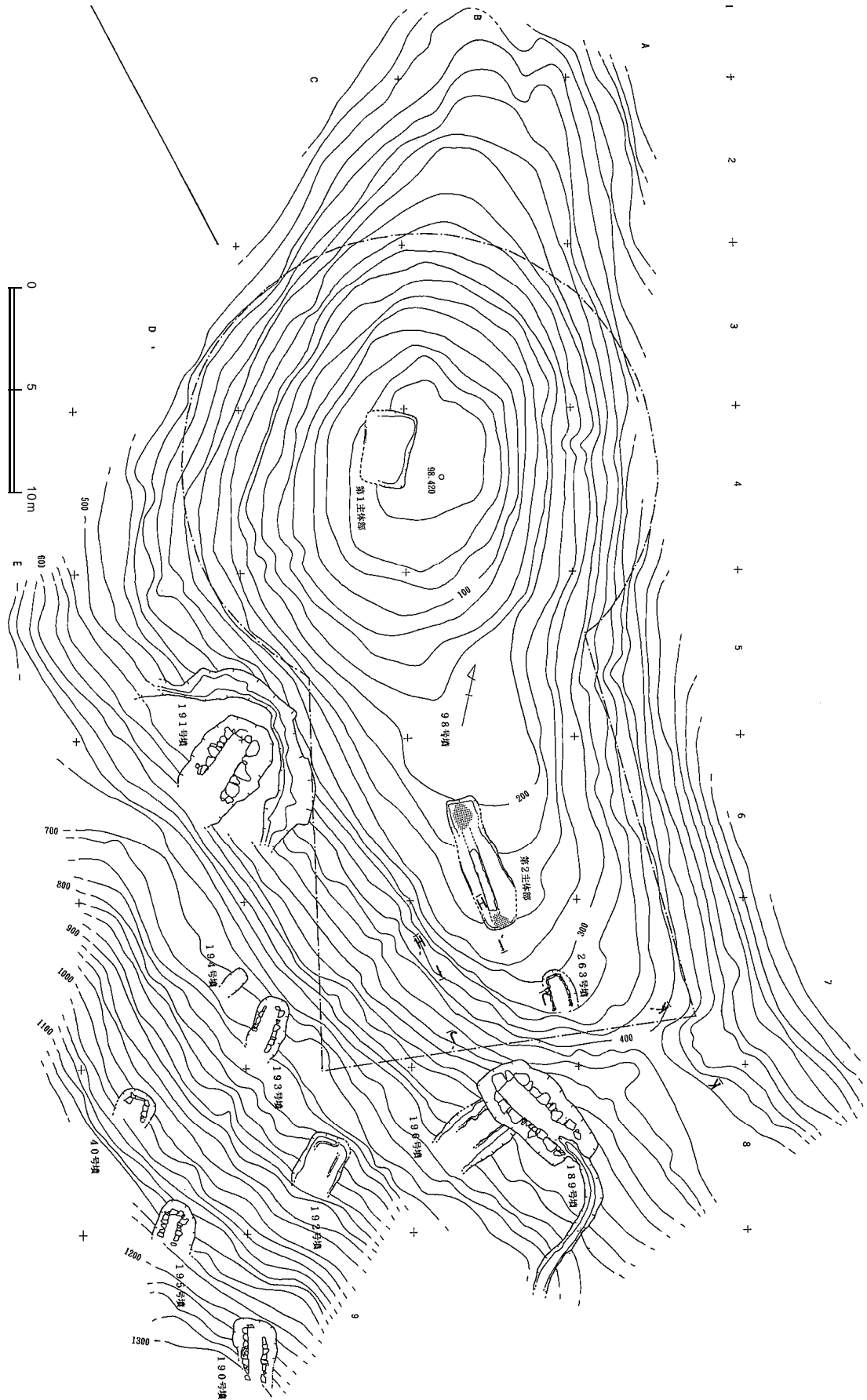


図2-6 船来山98号墳



図 2-7 船来山 99 号墳

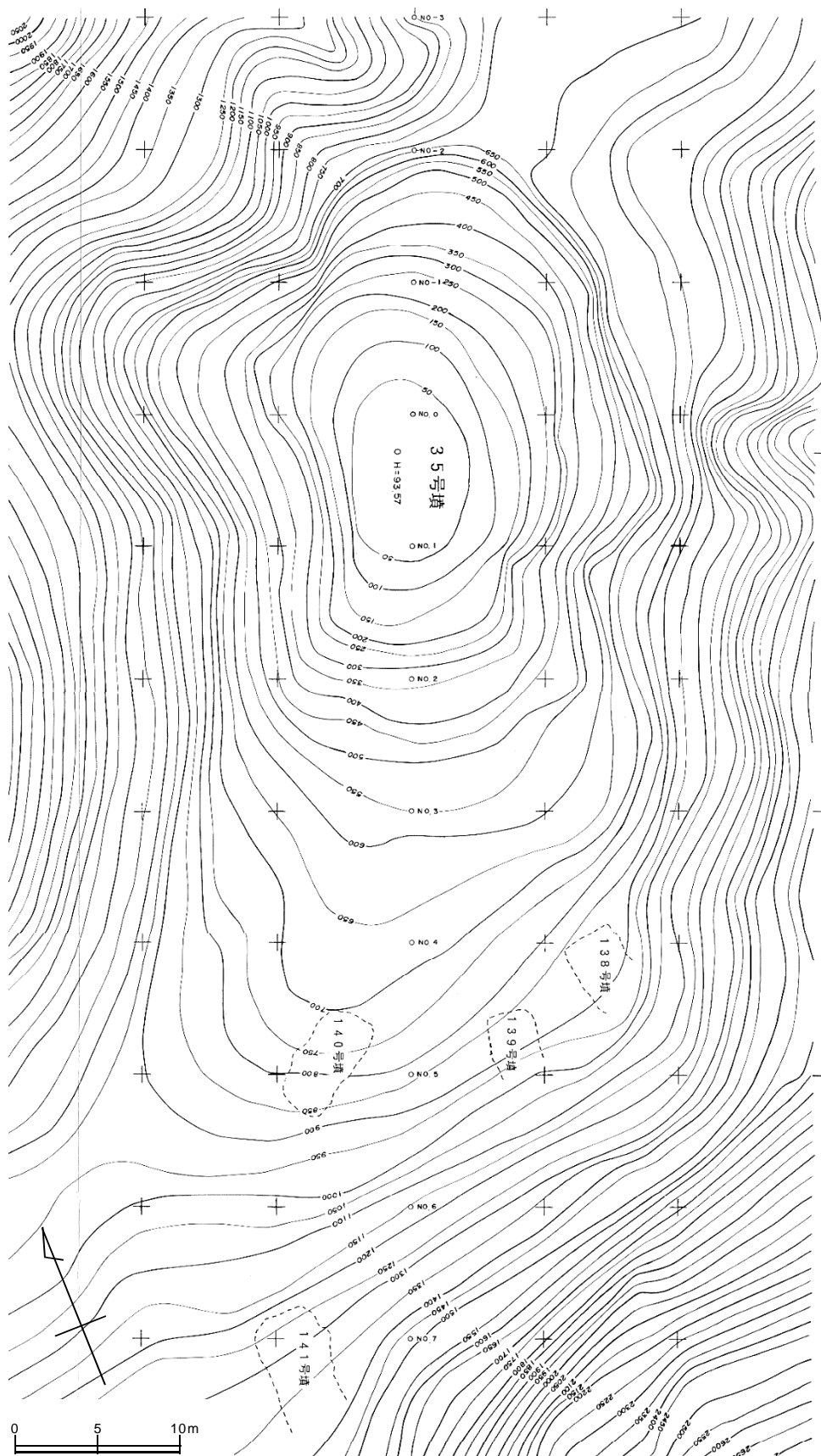
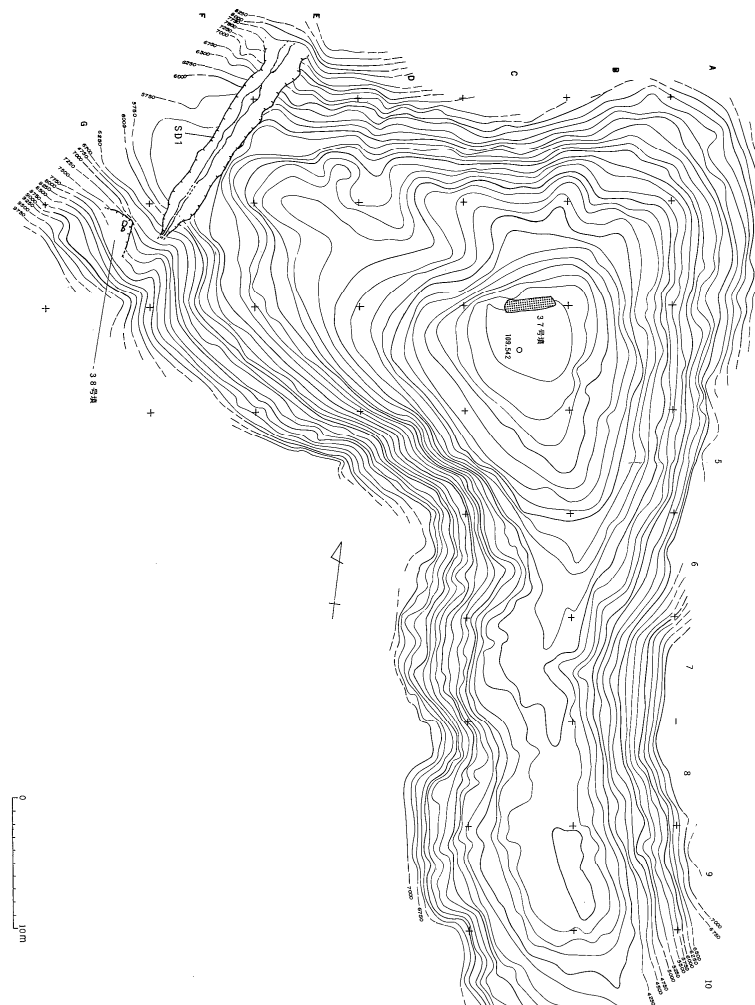


図 2-8 船来山 35 号墳



36号墳



37号墳

図2-9 船来山36号墳、37号墳

第 2 期

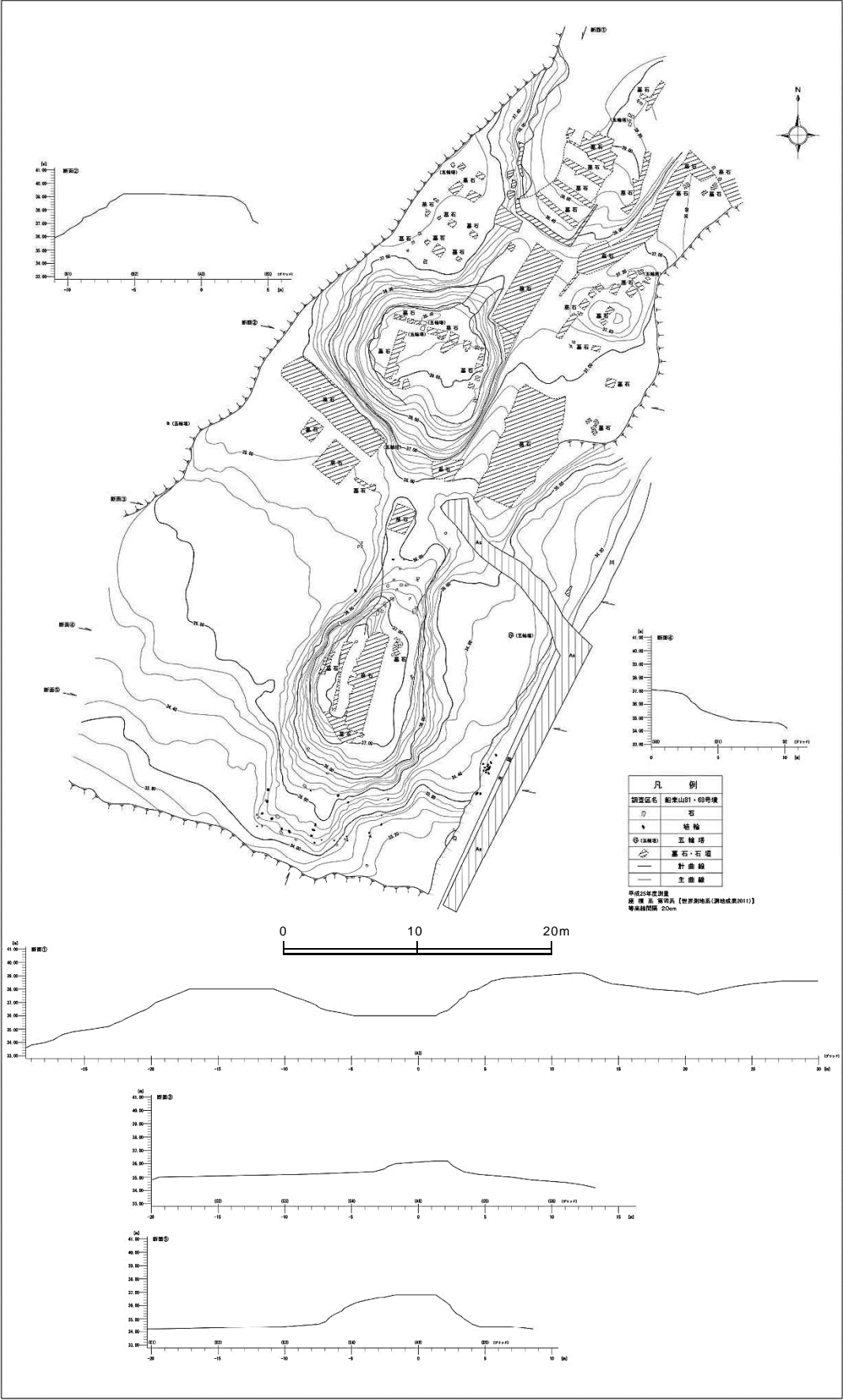


図 2-10 船来山 81 号墳

第3期

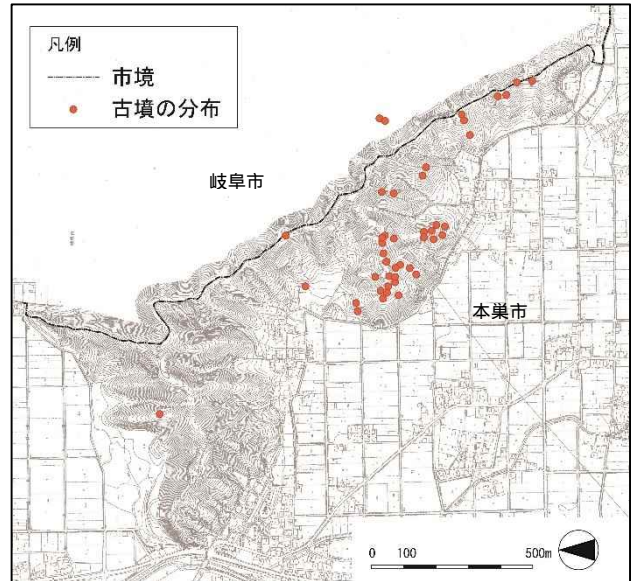
前期の前方後円墳が契機となって、初期の横穴式石室の群形成が始まった。

赤彩古墳(19号墳、272号墳、274号墳)が特徴的である。

石室の形態は非常にバラエティに富む。

- ・長方形の竪穴墓坑が発達した形で竪穴系横口式石室、横穴式石室の両袖式・片袖式・無袖式などバラエティに富んでいる。
- ・深い掘方に構築されている特徴がある。

雁木玉(19号墳)、トンボ玉(272号墳)、複環鏡板付轡ほか鉄馬具(29号墳)、須恵器など、豊富で豪華な副葬品が出土している。



145号墳出土当時の様子

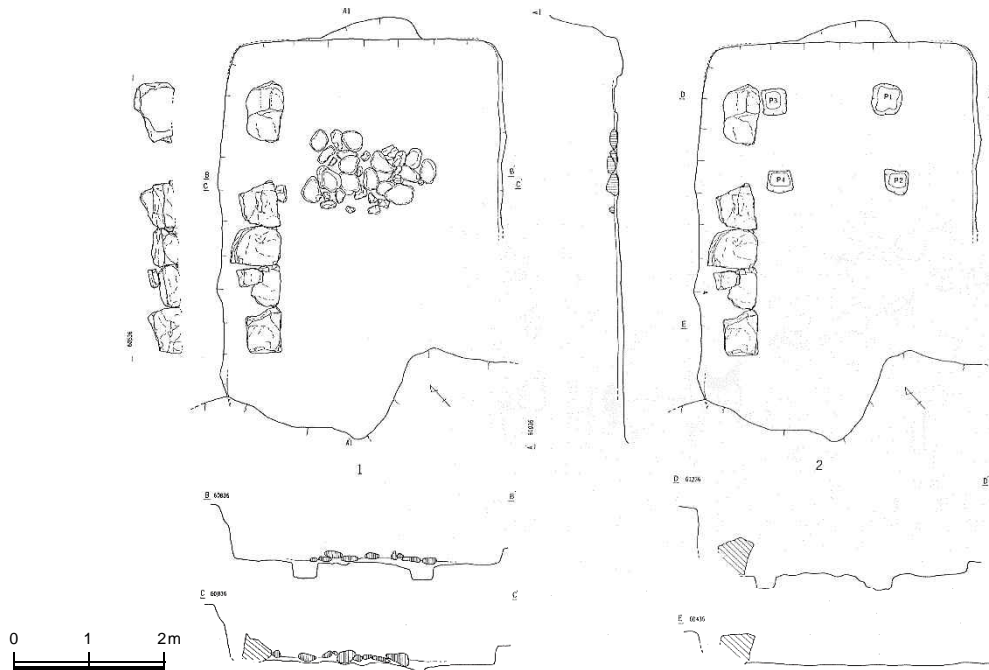
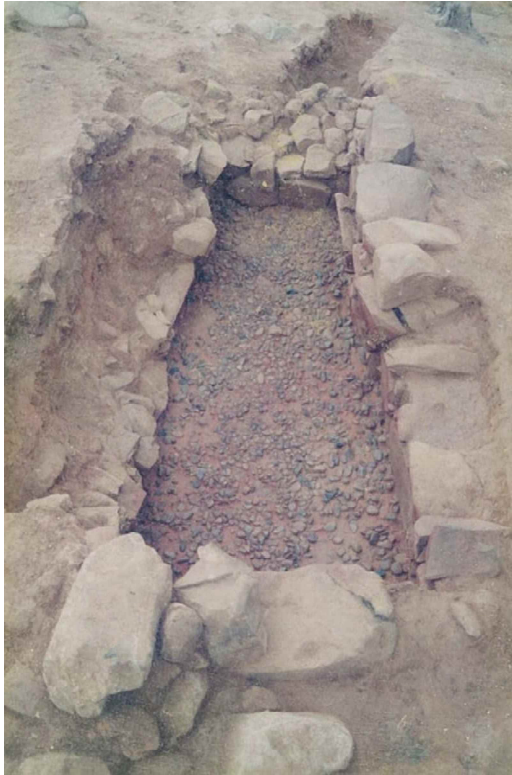


図 2-11 船来山 145 号墳 (M 支群) 竪穴系横口式石室



出土当時の様子



トンボ玉出土



須恵器出土

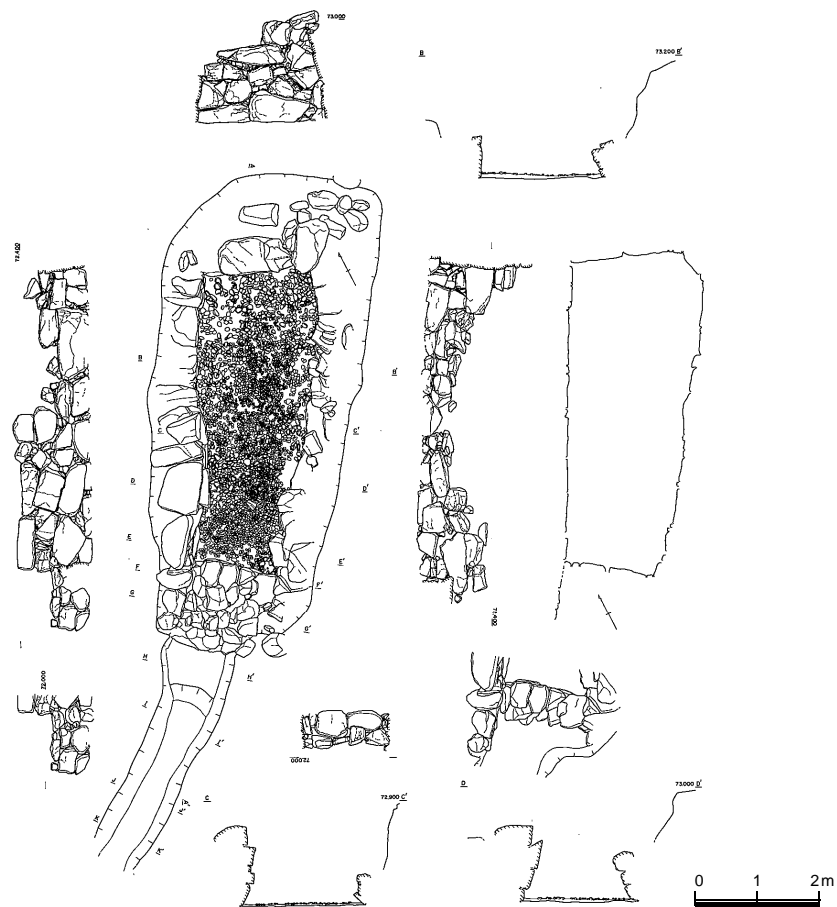


図2-12 船来山272号墳（O支群）竪穴系横口式石室



出土当時の様子



耳環出土



人骨（歯）出土

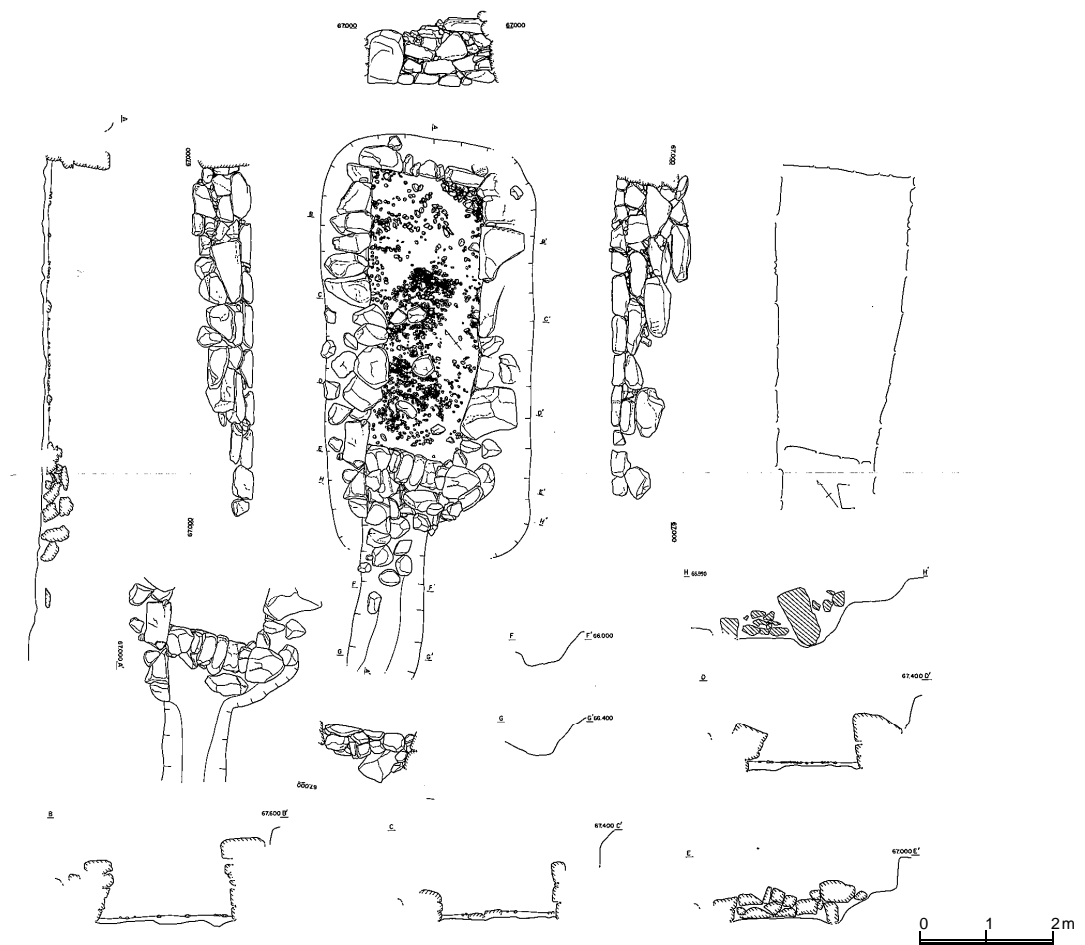


図 2-13 船来山 274 号墳（O 支群）竪穴系横口式石室

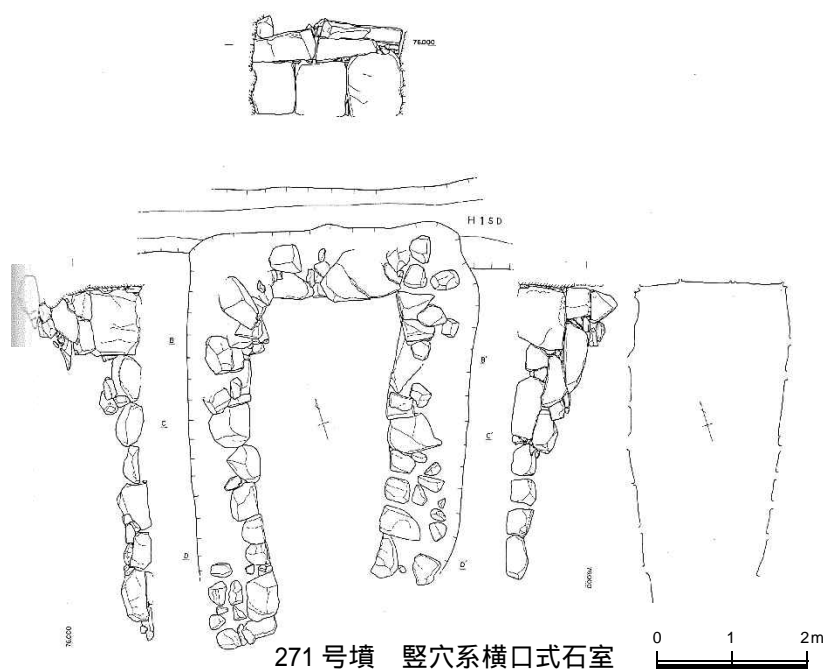
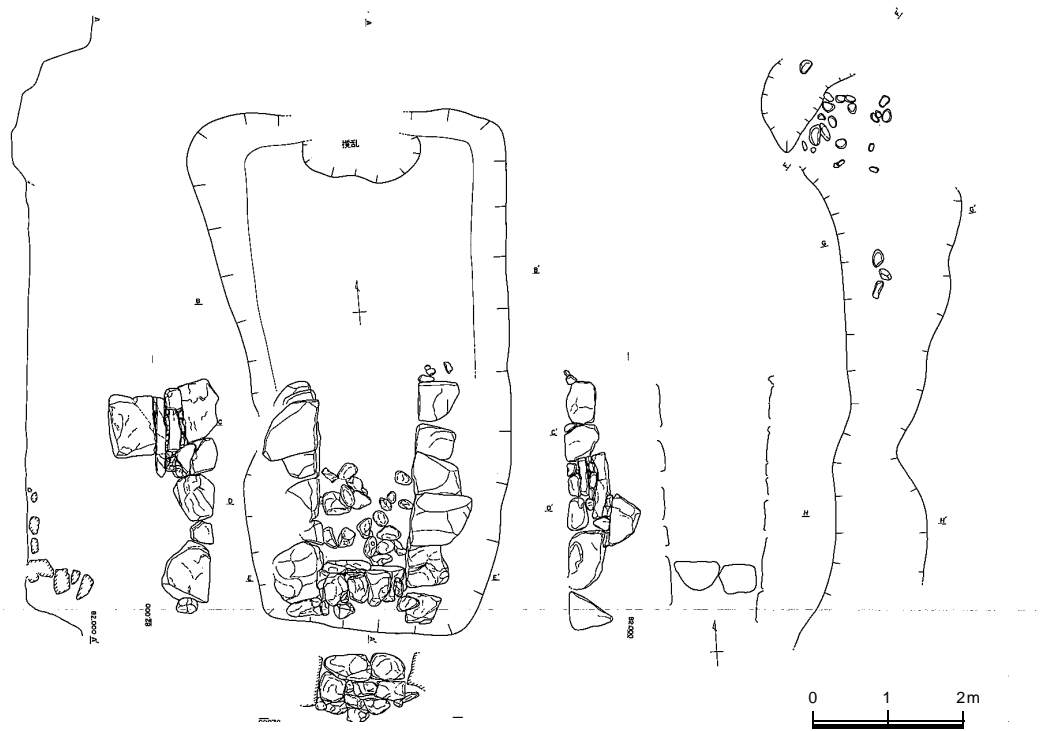
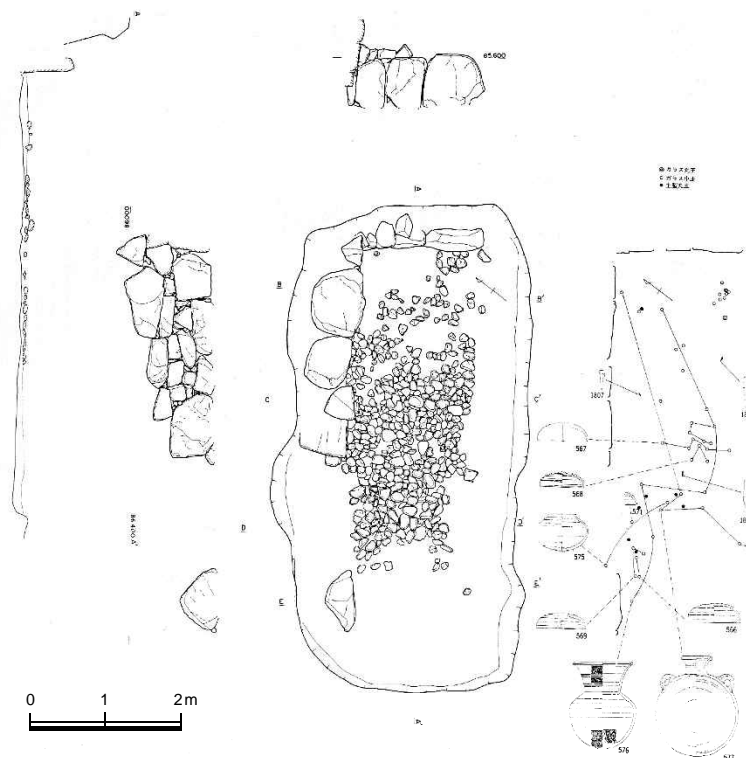


図2-14 船来山 264号墳、271号墳（O支群）

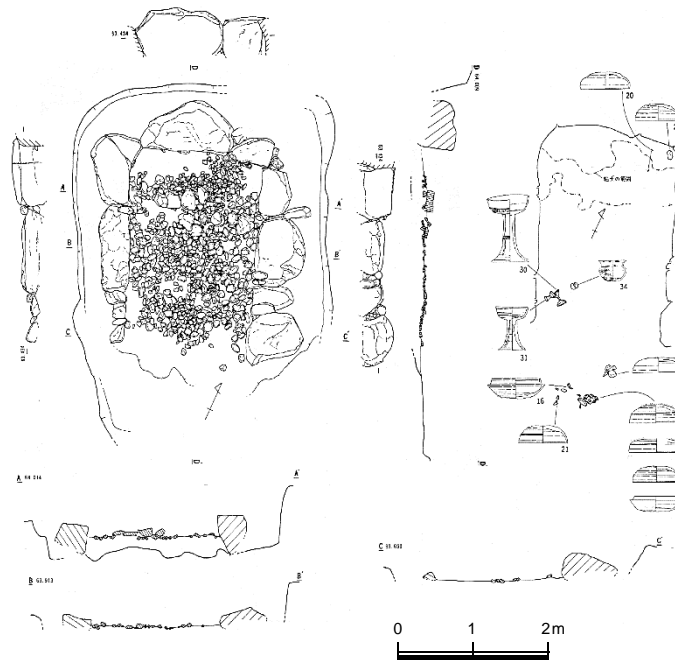


22号墳 竪穴系横口式石室

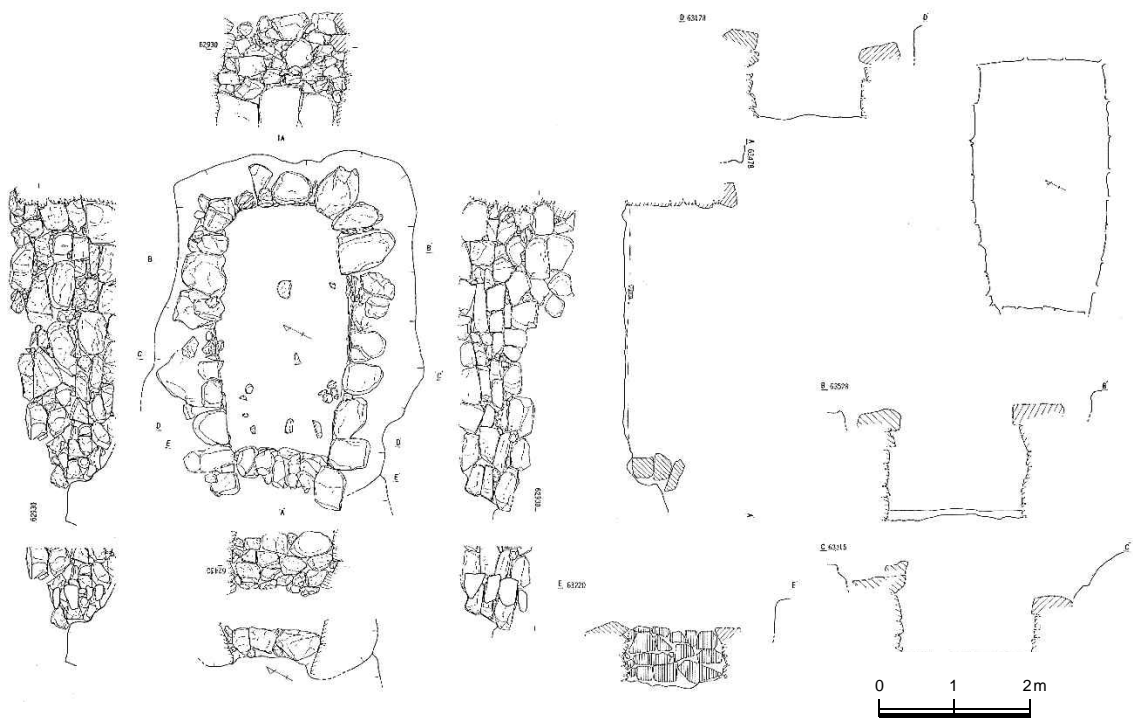


140号墳 竪穴系横口式石室

図2-15 船来山22号墳、140号墳(N支群)



29号墳 竈穴系横口式石室



169号墳 竈穴系横口式石室

図2-16 船来山29号墳、169号墳（G支群）



出土当時



鑿、須恵器出土



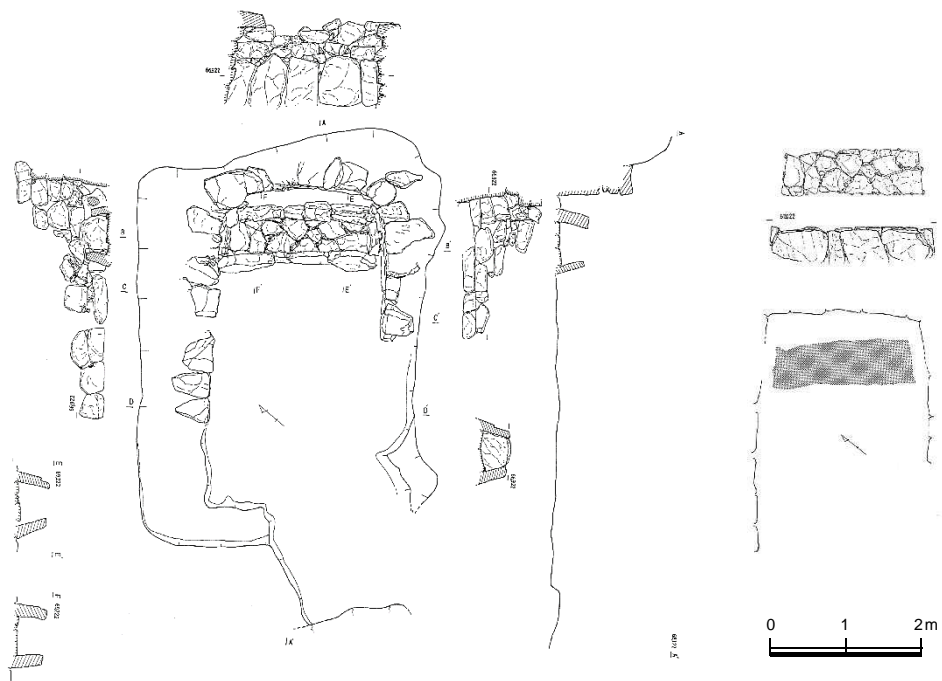
ガラス丸玉出土



図 2-17 船来山 19 号墳（O 支群）無袖式



151号墳 無袖式



154号墳 竪穴系横口式石室

図2-18 船来山151号墳（O支群）、154号墳（H支群）



出土当時



尾根から 109 号墳をのぞむ



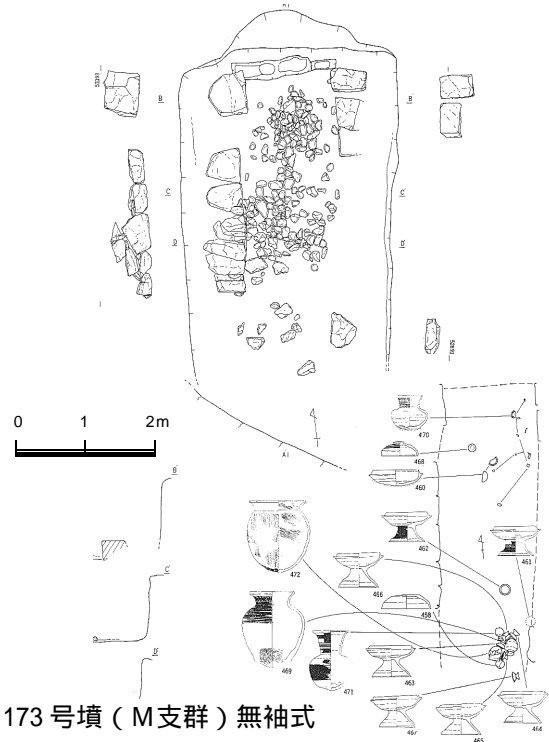
須恵器出土



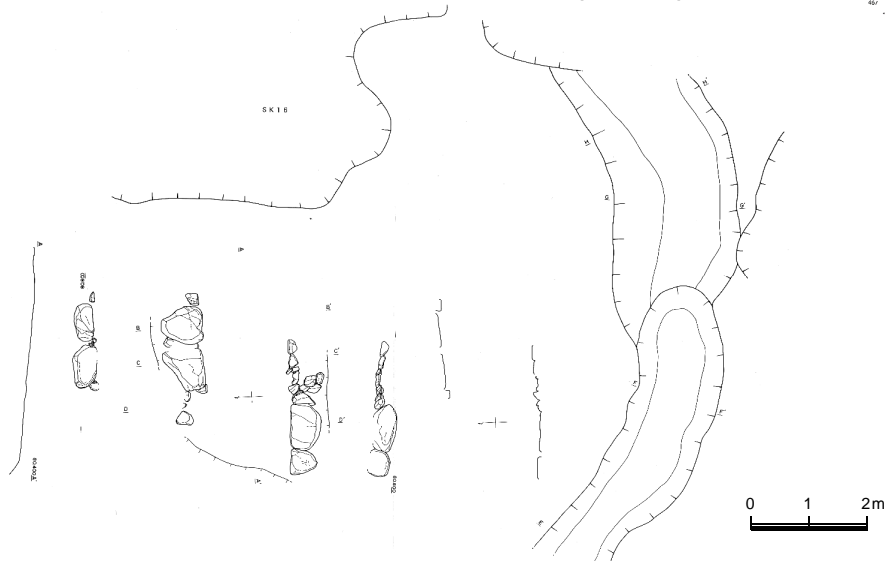
図 2-19 船来山 109 号墳 (S 支群) 竪穴系横口式石室



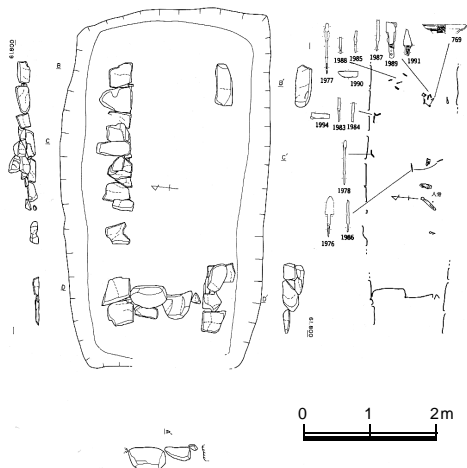
41号墳（Q支群）竪穴系横口式石室



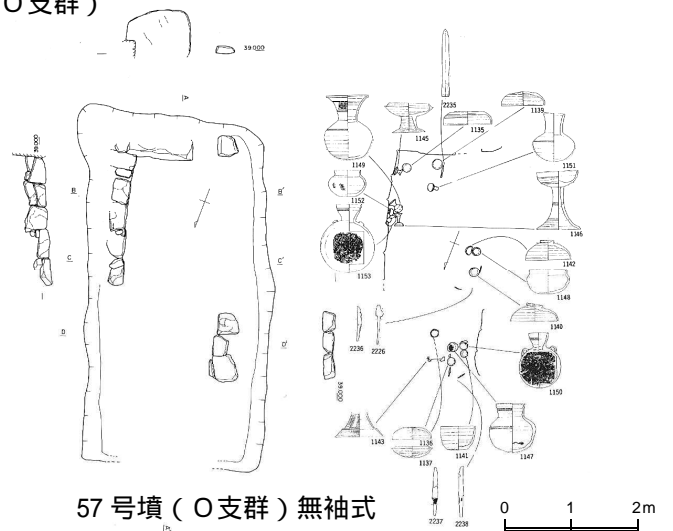
173号墳（M支群）無袖式



267号墳（O支群）



152号墳（O支群）無袖式



57号墳（O支群）無袖式

図2-20 船来山41号墳、173号墳、267号墳、152号墳、57号墳

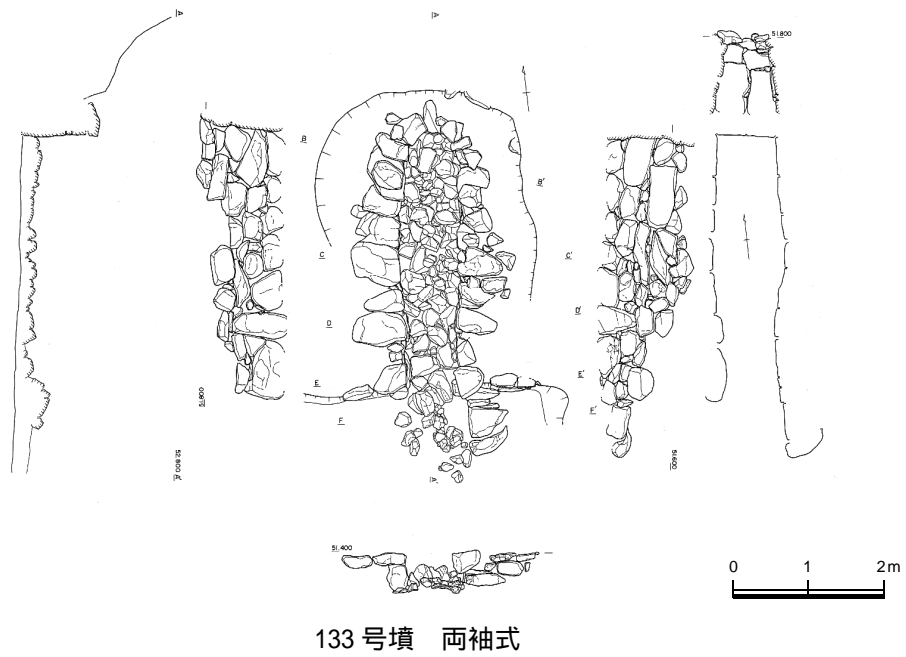
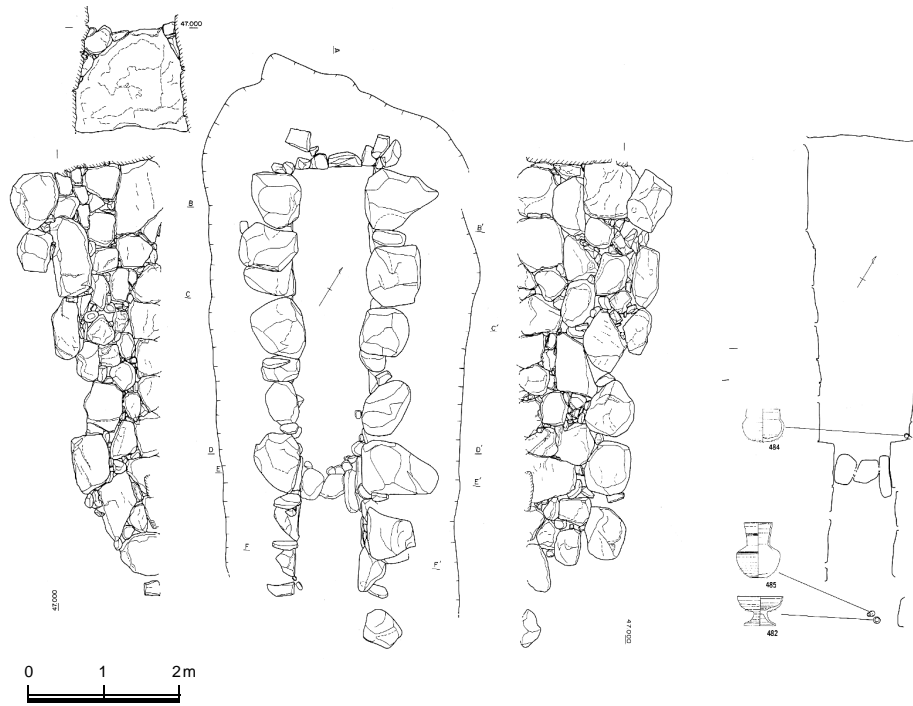
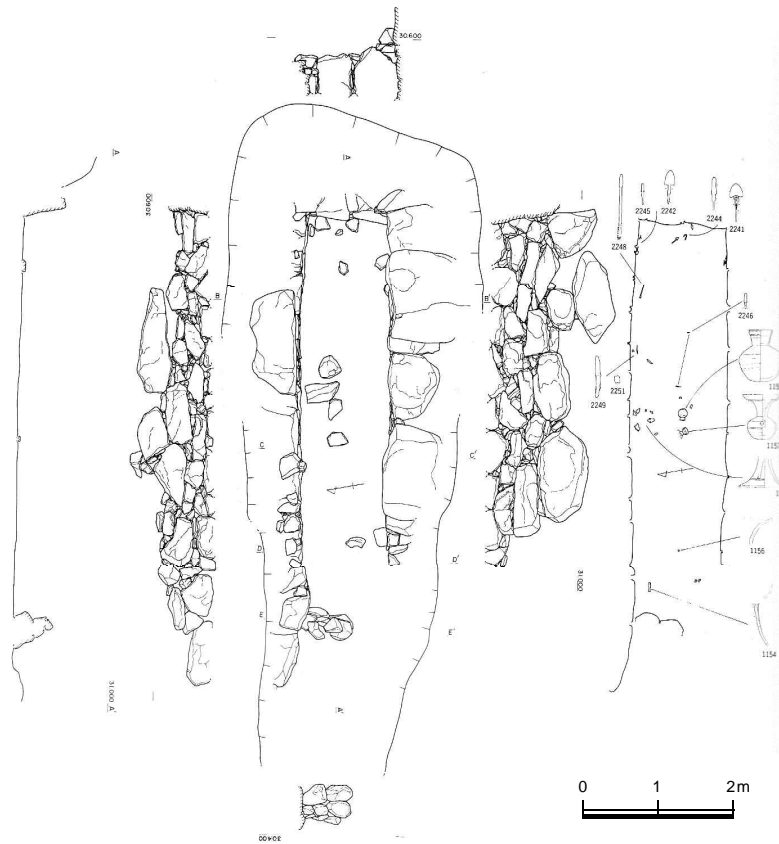


図 2-21 船来山 133 号墳 (G 支群) 280 号墳 (O 支群)



174号墳 両袖式



16号墳 無袖式

図2-22 船来山174号墳(M支群) 16号墳(O支群)

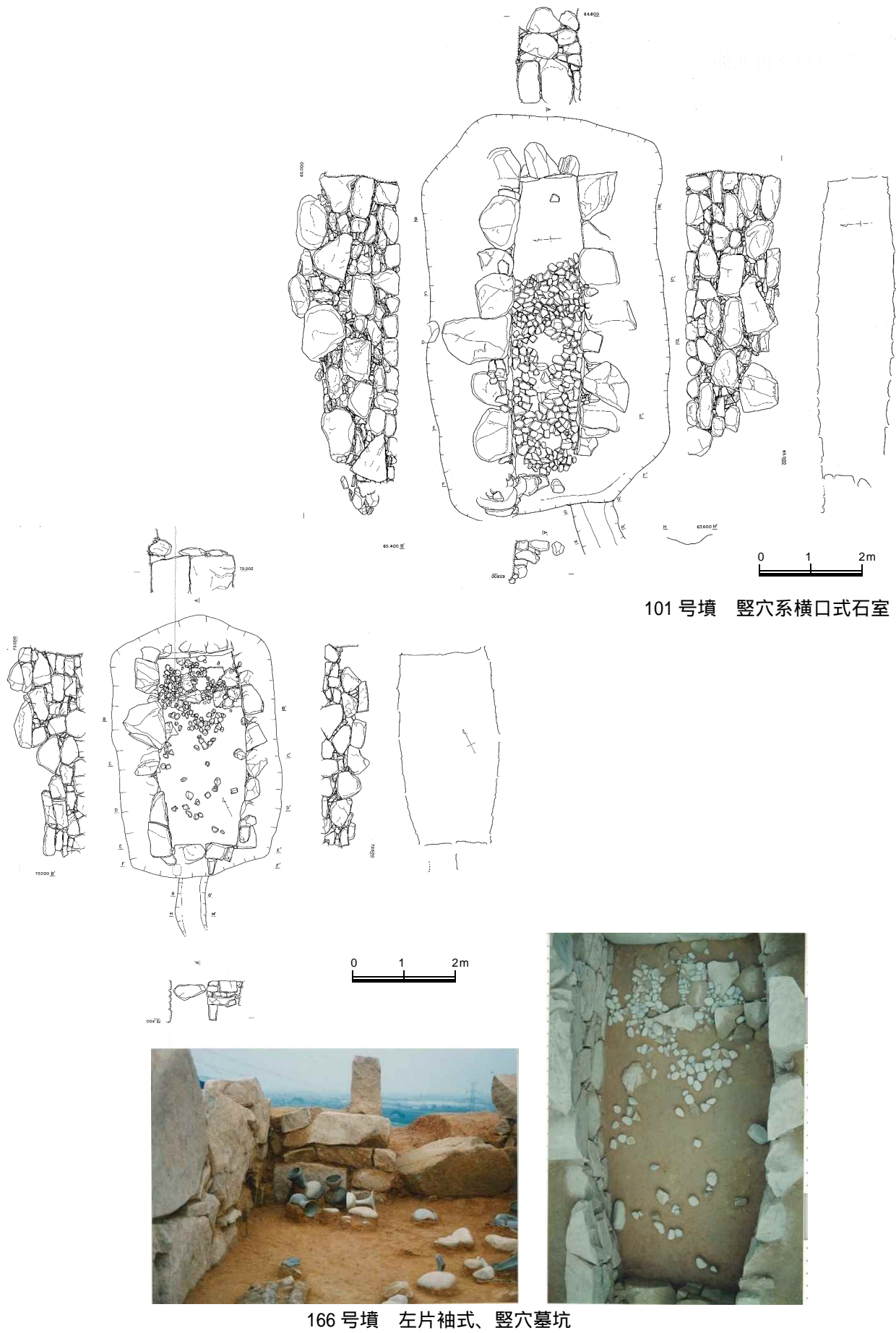


図 2-23 船来山 101 号墳、166 号墳（O 支群）

第4期

横穴式石室が定着し、両袖式や無袖式で長い羨道を伴う細長い遺構などがみられる。

斜面にL字状の削平を行い、南北線上を意図した均一性をもつ。

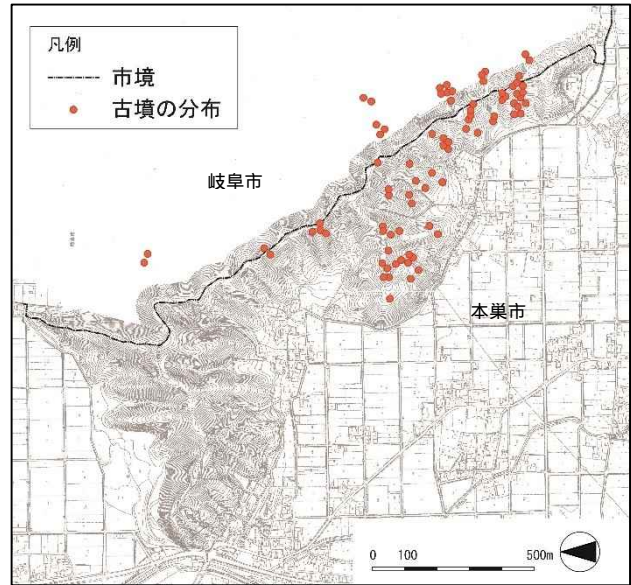
石室の小型化、在地化の傾向がみられる。

須恵器等が多数出土している。

分布は前期古墳が築造された主尾根部へ拡大している。

背後に堀割を伴う古墳が多数みられる。

O支群等、一部の支群では、7世紀まで新たに築造され続ける。



参考文献：『船来山古墳群』（1999年糸貫町教育委員会、本巣町教育委員会）

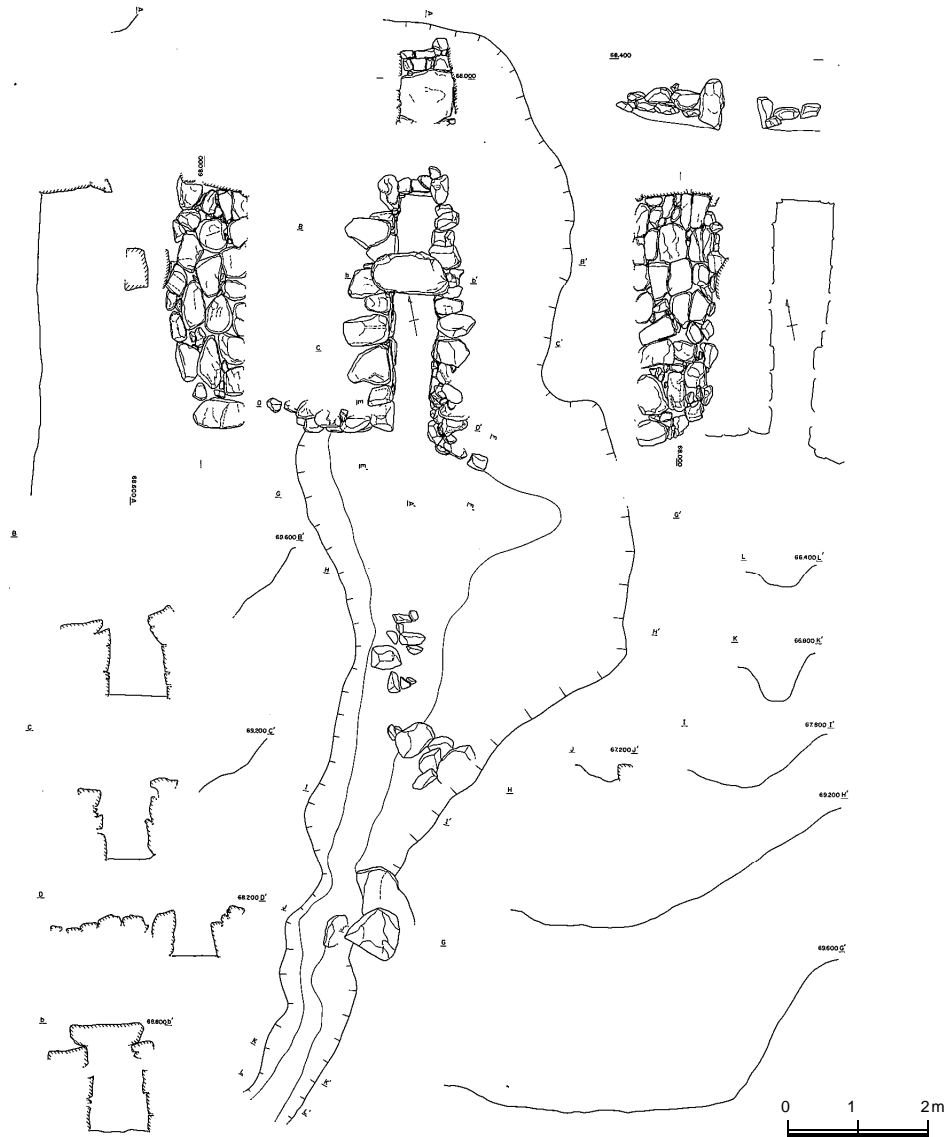


図2-24 船来山 273号墳（O支群）両袖式か

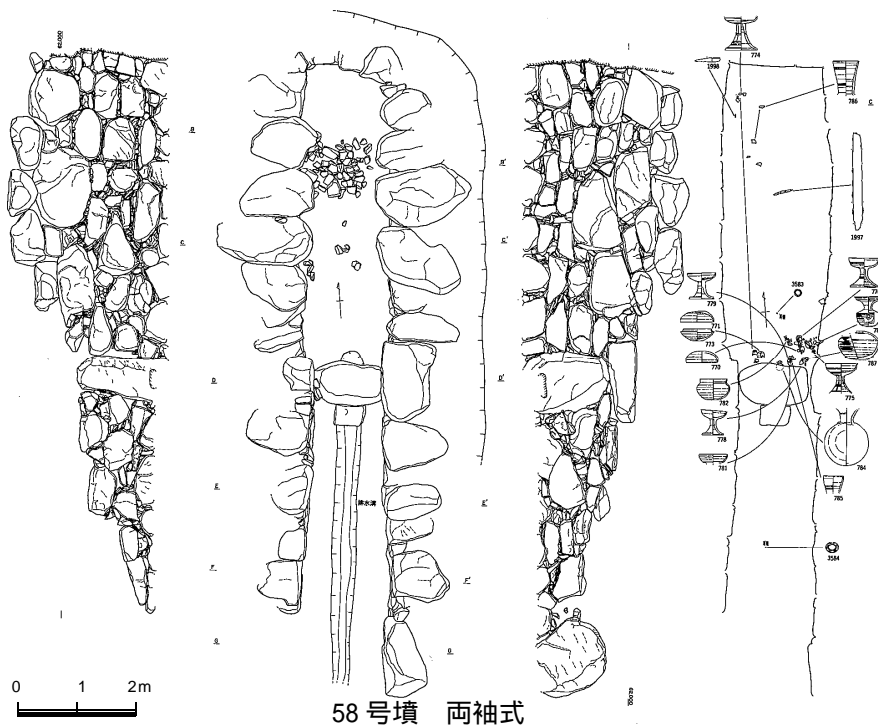
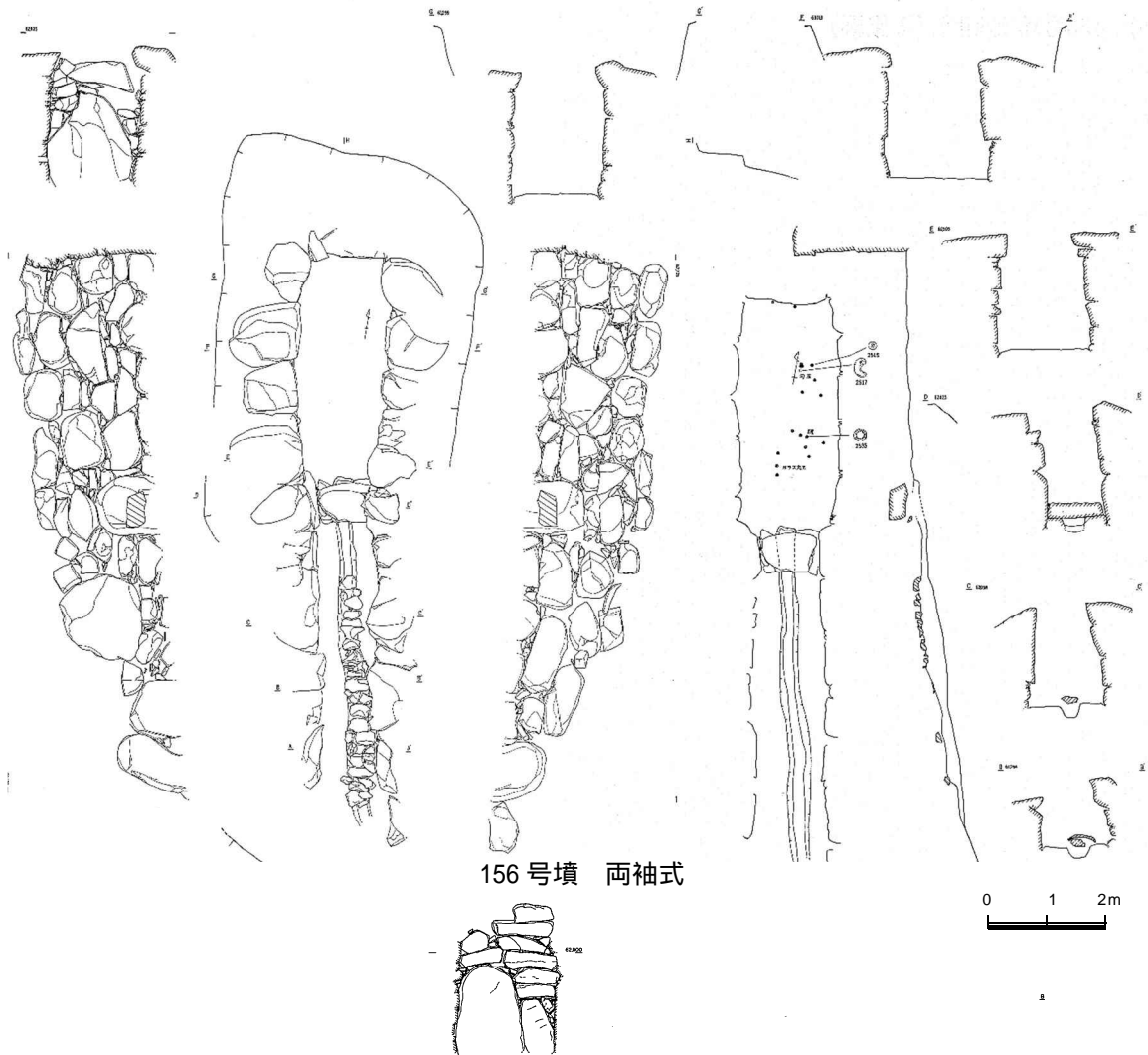


図2-25 船来山156号墳（Ⅰ支群）58号墳（Ⅱ支群）

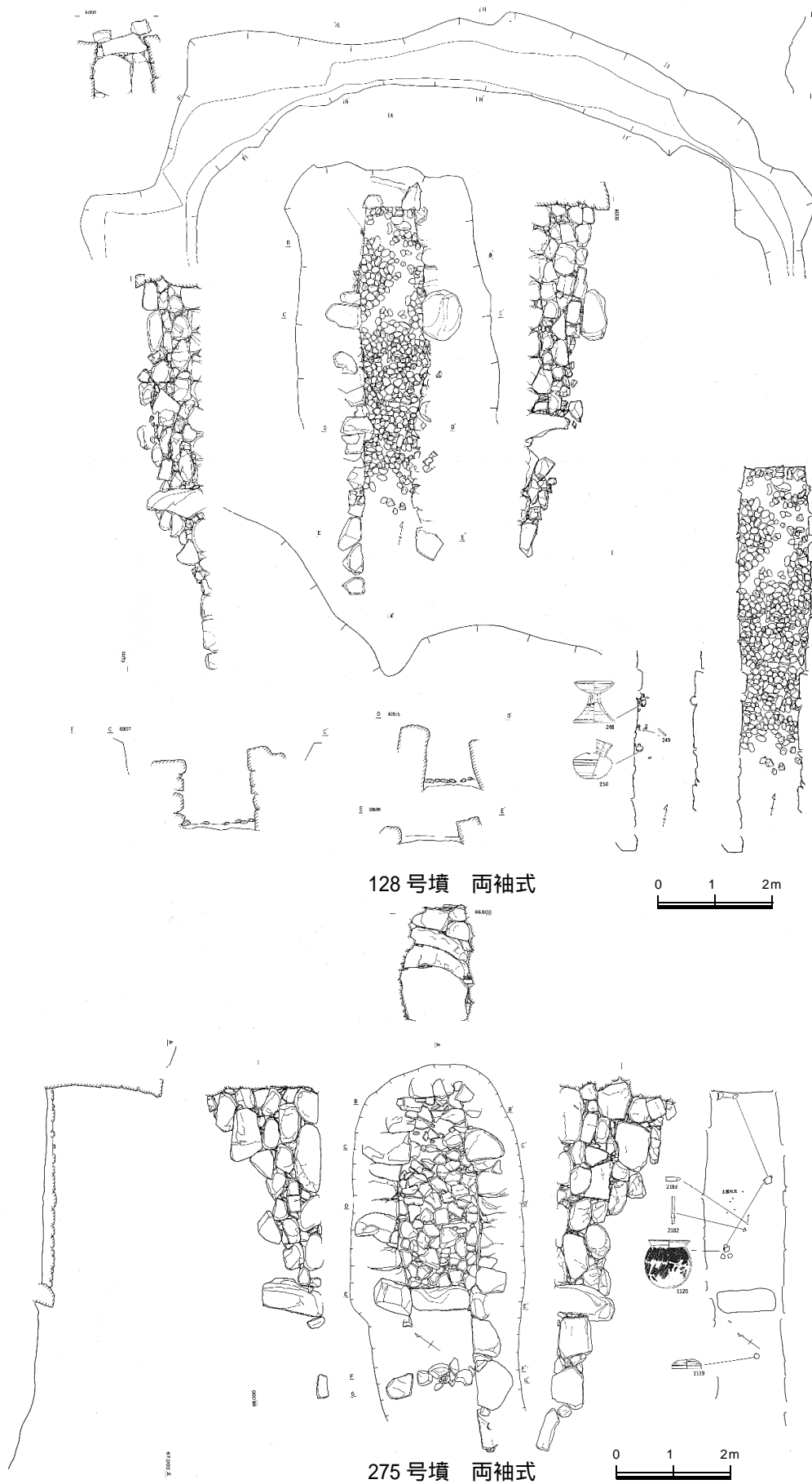


図 2-26 船来山 128 号墳 (H 支群) 275 号墳 (O 支群)

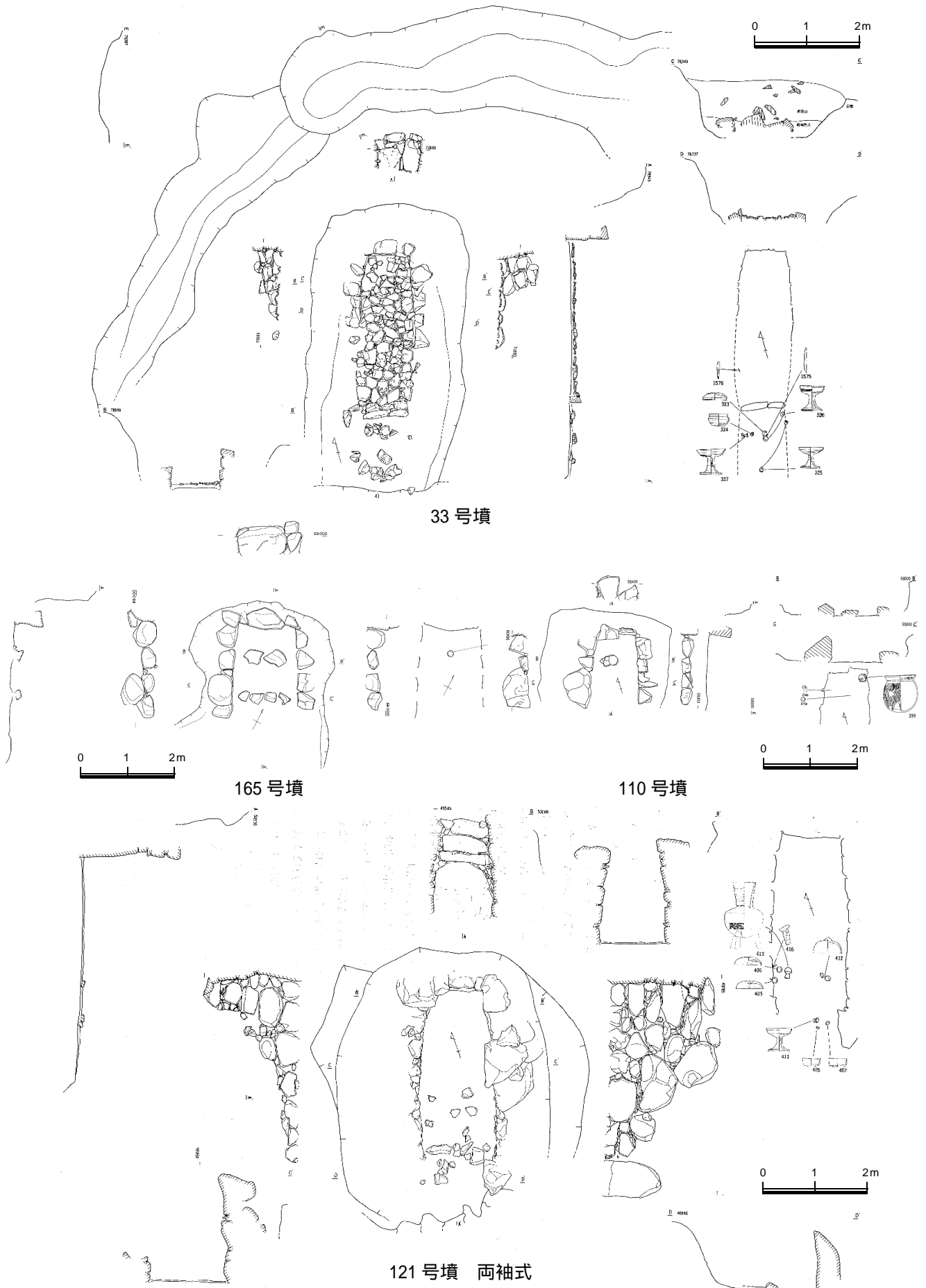


図 2-27 船来山 33号墳 (K支群) 165号墳 (N支群) 110号墳 (L支群) 121号墳 (L支群)

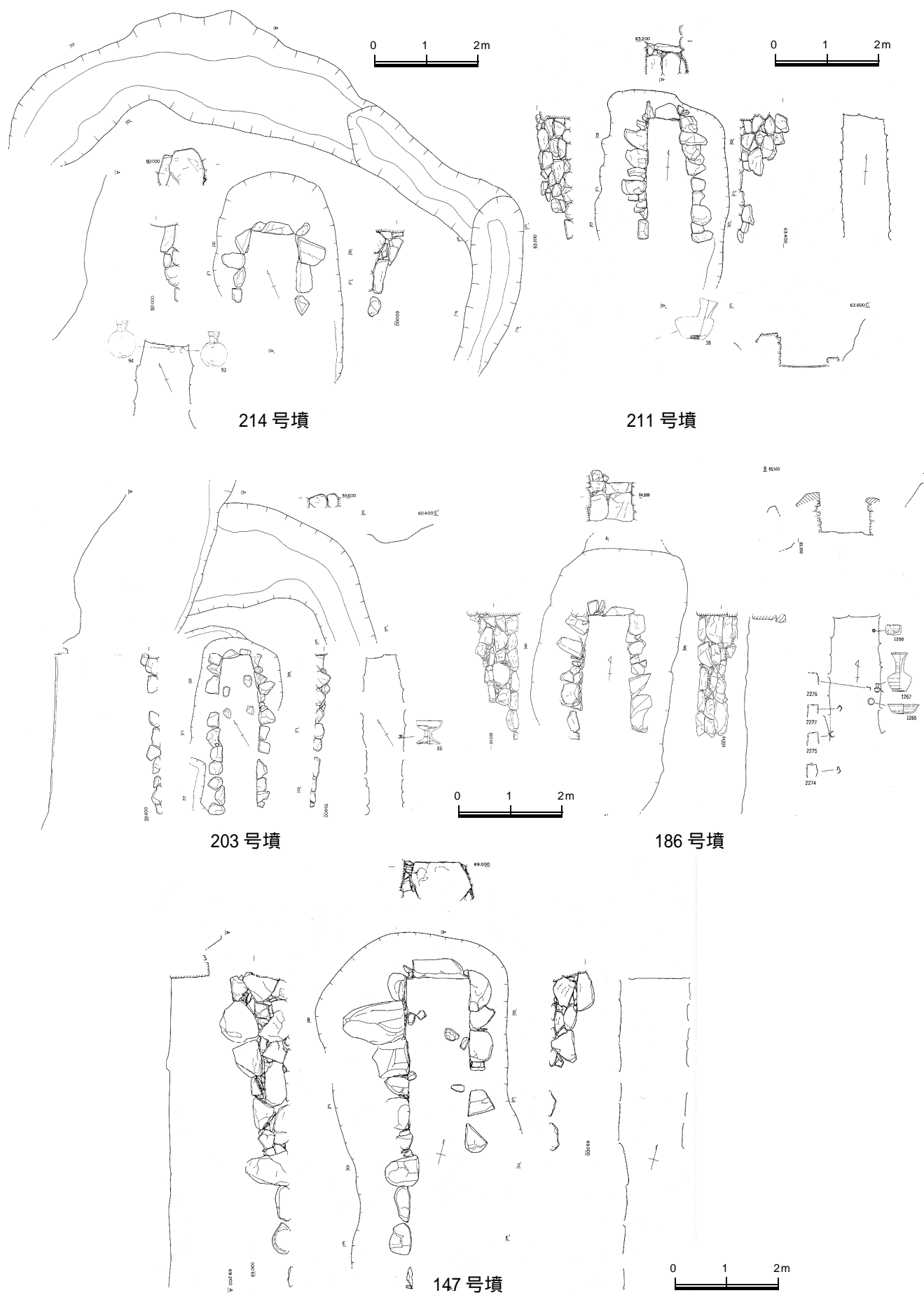


图 2-28 船来山 214 号墳、211 号墳、203 号墳 (G 支群)、186 号墳 (R 支群)、147 号墳 (O 支群)

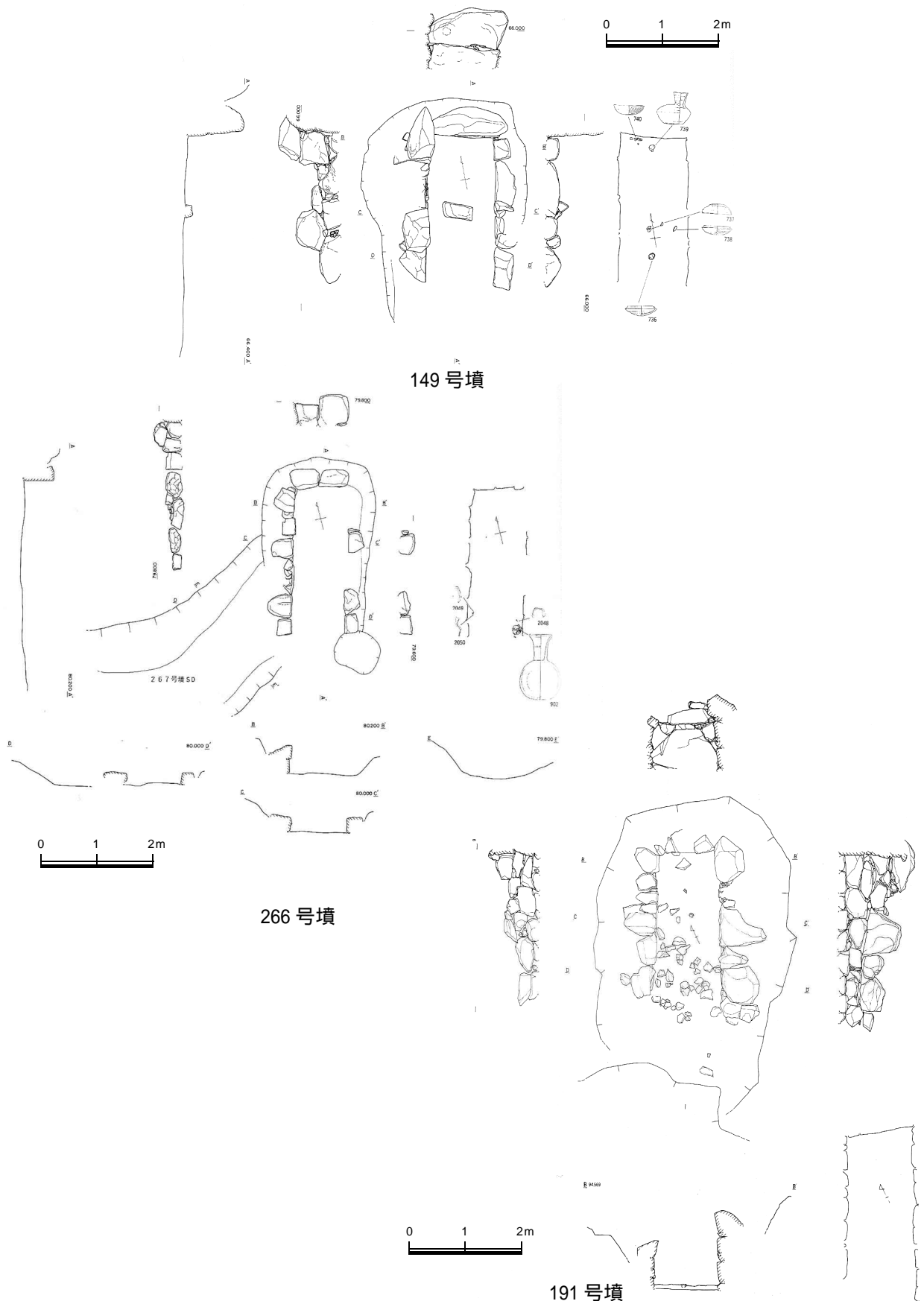


図2-29 船来山149号墳、266号墳（O支群）191号墳（Q支群）

(4) 出土品（副葬品）

船来山 24 号墳出土品

- ・昭和 42 年（1967）7 月 8 日、豪雨のため主尾根部が半壊状態となり、鏡、銅鏃、大刀、鉄剣、勾玉、管玉、ガラス玉、石釧など大変豪華な副葬品が出土した（『船来山古墳群』1999 糸貫町教育委員会、本巢町教育委員会）。
- ・西垣幹雄さん（上保在住）によって発見された後、出土品は一時席田小学校へ保管された。榑崎彰一名古屋大学助教授（当時）が招聘され、調査が行われた。出土品は国が買い上げて、現在は東京国立博物館に収蔵されている。
- ・古墳の規模は、直径約 20m、高さ 2.5m の円墳であり、割竹形木棺をもつ主体部と推測された。
- ・出土品の量もさることながら、鏡が 5 面も出土している。また銅鏃、鉄剣、大刀などの武器が多いという特徴がある。
- ・管玉・勾玉のサイズがたいへん大きいという特徴がある。単なる装飾品の域を超えている。
- ・時期は 4 世紀後半から 5 世紀の可能性が高いと考えられており、古墳時代前期から中期への過渡期の副葬品の特徴が見られる。

表 2-4 船来山 24 号墳出土品一覧（平成 24 年度からの資料調査の成果を含む）

変形半円方形帯神獸鏡	1	仿製
変形三角縁六神鏡	1	仿製
変形六神鏡	1	仿製
上方作銘獸形鏡	1	後漢鏡、破鏡
内行花文鏡	1	仿製
銅鏃	32	
鉄剣	26	
鉄刀	8	
刀子	2	
鉄鏃	1	
槍	1	
鎌	1	
鋸	1	
鋒	1	
勾玉	8	瑪瑙、翡翠、琥珀
管玉	163	
ガラス小玉	252	
石釧	3	
不明鉄製品	2	
土器	100	破片、所在不明
木棺	7	破片、所在不明



右上 出土当時の新聞記事

武具・馬具

-1 前期古墳

- ・98 号墳（Q 支群）では、出土当時全国で 17 番目の出土例となる方形板革綴短甲が出土した。木棺内より出土した貴重な例である。木棺内からは水銀朱も検出されている。
- ・同古墳では、木棺外より鉄鏃と鉄剣が出土し、4 世紀後半の古墳と推定される。

-2 後期古墳

- ・後期古墳のうち、特に6世紀代の古墳には馬具が副葬される例があり、290基中12基にものぼる。
- ・29号墳（G支群）からは複環式鏡板付轡が出土したほか、素環鏡板付轡、二条線引手、辻金具、飾金具、鉾、責金具、鉸具、鞍などが出土した。複環式鏡板付轡、二条線引手には、振じりが施され、貴重な事例である。
- ・264号墳（O支群）では、素環鏡板付轡、鉸具、辻金具、責金具、鉾、飾金具などまとめて出土した。
- ・142号墳（N支群）で出土した雲珠は、鉄地金銅張の雲珠で、貴重な事例である。
- ・馬具が副葬された古墳は、いずれも6世紀代のものであり、7世紀に入るとみられなくなるという特徴がある。



98号墳出土 方形板革綴短甲



29号墳出土 複環鏡板付轡



馬具の装着想像展示

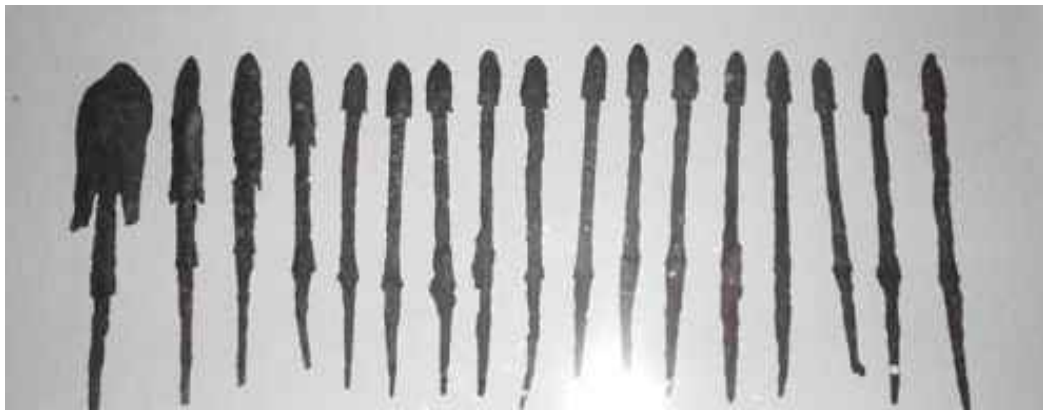
武器類

-1 前期古墳

- ・98号墳（Q支群）では、前方部主体部の棺外より鉄剣1点、鉄鏃3点が出土した。このうち鉄鏃は、柳葉式で、4世紀後半のものと推定される。
- ・99号墳（R支群）からは、完形の鉄槍が出土している。

-2 後期古墳

- ・大刀は21基の古墳より出土した。このうち刀装具の出土は12基、確実に装飾付大刀と考えられるものの出土は8基にのぼる。
- ・272号墳(O支群)からは掬じり環頭柄頭が、97号墳(L支群)からは銀象嵌を施した鐔、貴金具、29号墳(G支群)からは金銅三輪玉4点出土した。
- ・鉄鏃は41基の古墳より約500点が出土し、ほとんどが6世紀代の古墳からの出土である。35点～100点までの大量に副葬された古墳は4基にものぼる。7世紀代の古墳からは1、2点程度出土する程度になる。
- ・鉄鏃の形式が、前期の98号墳出土の柳葉式に比べ、29号墳等出土の腸袂柳葉式へと変化し、さらにより遠くに飛ばすことが出来る合理的な長頸式柳葉形に変化していく過程が垣間見える良好な資料が多い。
- ・弓本体に穴をあけ、取り付けたと考えられる弓飾金具が、272号墳等の5基の古墳から出土した。
- ・57号墳(O支群) 177号墳(M支群)からは鉄矛が出土している。



29号墳出土鉄鏃



大刀の復元展示

装身具

-1 前期古墳

- ・ 98 号墳（Q 支群）からは、緑色凝灰岩勾玉 1 点、ガラス小玉 2 点が出土している。
- ・ 24 号墳出土品は、上記のように 163 点の管玉、252 点のガラス玉、8 点の巨大な勾玉が出土した。管玉も 8 cm 近い巨大なものもあり、単なる装飾品の域を超えている可能性がある。

-2 後期古墳

- ・ 赤彩古墳 19 号墳（O 支群）からは雁木玉、赤彩古墳 272 号墳（O 支群）からは 23 個のトンボ玉が出土している。
- ・ 雁木玉は、出土当時全国で 6 番目となる発見例で、2 個同時に出土した貴重な事例である。
- ・ 雁木玉は、雁の羽に見られる色違いの縞模様に似ていることから名づけられたと言われている。デザインとその高度な技術は、地中海東岸にあたる西アジアから伝わり、中国大陆で作られた可能性が指摘されている。
- ・ 赤彩古墳 272 号墳（O 支群）から出土したトンボ玉 23 個は、出土当時全国 1 位の出土量である。
- ・ 耳環は、ほとんどが銅芯鍍金のものだが、19 号墳、272 号墳、150 号墳、166 号墳、（O 支群）29 号墳（G 支群）173 号墳（M 支群）からは、細い銀、金の耳環が出土している。
- ・ 空玉は 4 基の古墳から出土した。19 号墳、264 号墳（O 支群）173 号墳（M 支群）の空玉は銀、150 号墳（O 支群）の空玉は金銅である。
- ・ 土製丸玉は、総数 2254 点を超え、玉類を副葬していた古墳 38 基のうち、約半数の 17 基より出土している。
- ・ 約 3000 点を超すガラス玉、水晶の管玉、碧玉の管玉など、大量の装身具が出土している。特に O 支群にガラス玉の大量副葬が集中している。
- ・ 勾玉は、科学分析の結果、156 号墳（I 支群）166 号墳（O 支群）出土のヒスイ勾玉の産地が新潟県糸魚川産硬玉と判明している。
- ・ 特に 6 世紀代の古墳に、装身具の大量副葬が集中しており、7 世紀代に入ると減少していく傾向がみられる。



玉類装着復元展示



出土玉類



赤彩古墳 19 号墳より出土した雁木玉



出土耳環、空玉類

農工具

-1 前期古墳

- ・鉄ヤリガンナの副葬が多く、37 号墳（J 支群） 98 号墳後円部主体部（Q 支群） 99 号墳（R 支群）から出土している。
- ・262 号墳（G 支群）からは鉄鍬鋤先が出土しており、貴重な事例である。

-2 後期古墳

- ・後期古墳からは、全体の 3 分の 1 の古墳から農耕具が出土した。
- ・188 号墳（Q 支群）の鉄鋤先は、U 字型の鋤先であり、貴重な事例である。
- ・150 号墳（O 支群） 142 号墳（N 支群） 198 号墳（H 支群）などからは、ミニチュア農耕具が出土している。
- ・鍬子は 29 号墳、170 号墳、215 号墳（G 支群） 103 号墳（K 支群）から 4 点出土した。



農耕具復元展示

土器

-1 前期古墳

- ・26号墳、262号墳（G支群）からは、二重口縁壺、S字状口縁台付甕などが出土しており、前期古墳の時代を考える事例である。
- ・SK1、SK3（T支群）では、土坑墓から同様の土器が出土しており、山麓の土坑墓と山頂の前期古墳とがどのような関係であったのか探る資料である。

-2 後期古墳

- ・出土した須恵器のうち、6世紀代のものは色調が灰褐色を帯びており、尾張産の須恵器とは異なる可能性が指摘されている。近江産の須恵器、畿内系の須恵器との関係も指摘されている。
- ・272号墳（O支群）出土須恵器は、他の古墳に比べ圧倒的に出土量が多い。築造時から追葬の時期等を考える事例である。
- ・272号墳（O支群）出土の装飾須恵器は、長頸壺とセット関係を指摘されており、器台坏部内面からベンガラが検出されている。
- ・272号墳（O支群）からは、土師器把手付盃等、変わった形の土師器が出土している。
- ・176号墳角付盃（M支群）、121号墳三足壺（L支群）など、変わった形の須恵器も出土している。176号墳の角付盃は、近畿から山陰地方にかけて出土例がある。
- ・121号墳の三足壺は、首の長い壺に3本の足がつけられ、口の上にはつまみのついた蓋がかぶせられている。日本古来の形状ではなく、岐阜県内では、垂井町綾戸古墳出土例の2例のみである。
- ・石室の奥壁隅に、小型の土師甕を埋納する事例があり、173号墳（M支群）、110号墳（L支群）では、ほぼ完形の土師甕が出土している。



SK1、26号墳、262号墳出土土器

272号墳須恵器出土状況





272 号墳出土把手付盃



176 号墳出土角付盃



121 号墳出土三足壺



110 号墳出土土師甕



173 号墳出土土師甕

(5) 被葬者像

骨片からの被葬者像

1993年5月から1996年5月にかけて行われた発掘調査で出土した人骨から鑑定が行われている。出土した人骨はいずれも保存状態が悪く、鑑定は困難な状況ではあったが、その中から得られた被葬者像については、以下の点が示されている。(京都大学総合博物館橋本裕子氏による)

- ・人骨の総数は推定最小個体数で34個体。
- ・このうち10代から20代の若い年齢層が多くを占めている。
- ・当時の平均寿命(30代半ばから後半)と比較しても全体的に若い年齢での死亡率が高い。(ただし、乳児や幼児、華奢な女性の人骨は残存しにくい上、本古墳群では追葬の際に石室内で集骨「かたづけ」を行っているため、その中で小児骨や女性の骨を破損してしまうことも推測されることから年齢層の割合については慎重に論じる必要がある。)
- ・M支群、O支群から出土した大腿骨からは、大腿骨背側に「ピラスター(付柱)」の発達と前後の彎曲といった特徴が確認された。「ピラスター」は、縄文時代などの狩猟採集民には大きく発達して顕著にみられるが、弥生時代以降の定住民から現代人までのヒトにはほとんど認められない。これらは、乗馬姿勢や武士の殿中における前傾摺足の作法などによるものと指摘されている。本古墳群では合計11基の古墳から馬具製品の出土が確認され、このほかにも馬具に関係する資料の出土も多く確認できることから、本古墳群の被葬者は「日常的に乗馬をし、馬具を副葬する階級に相当する」ことが分かる。それぞれの古墳の時期が異なるため、「世代がかわっても引き続き、馬や馬具を所有できる階層」であったことがうかがえる。

表 2-5 船来山古墳群出土人骨一覧

古墳番号	年 齢				個体数
	10歳未満	10～20代前半	20～30代	不明	
29				1	1
97					
100		1			1
103				1	1
150		1			1
151		1			1
154		1			1
160			1	1	2
166				1	1
169				1	1
173		1			1
176		3	2		5
177				1	1
178	1		2		3
265		1	2		3
271	2		2		4
274	1	2	2		5
275				1	1
280			1		1
合計	4	11	12	7	34

出典 『古代と未来のかけ橋 船来山古墳群』(2015年、本巢市教育委員会社会教育課)

被葬者像に関するその他の事項

- ・古墳群と周辺の集落の様相から考えると、船来山古墳群は、「村の墓地」というより、「山の墓地」に近いのではないかと考えられ、被葬者層に関しても、近隣集落だけでなく遠隔地の集落も含めて考える必要があるとされている。

「村の墓地」：集落が見える位置に小規模な古墳が営まれる

「山の墓地」：遠隔地の名山のもとに大規模な群集墳が形成される

(6) 古墳等の破損・劣化・風化等の状況

- ・中世・近世の土地利用による地形改変や石材調達によって、墳丘上部の削平や石室石材・葺石の消失、移動、土砂流亡などによる自然崩壊といった、人為や自然による破壊の状況がみられている。
- ・開発計画に伴い発掘調査された古墳の多くは、石室等の遺構が露出したまま埋め戻されず、放置されている状況にある。そうした場所はクサギやアカメガシワ、センダン、ワラビ、クズ等の植物が繁茂し、隣接する竹林から竹が侵入している状況もあり、中には石室内から生えてきた木本が根を広げ、古墳の破損を加速する要因となっている。
- ・露出した石室の石の表面に剥離が見られたり、経年変化でできた石の小さな亀裂に雨水が入り込み、さらに大きな亀裂になるなど、石の風化が進行している。
- ・発掘時のトレンチ跡等、埋め戻されない地表面の凸凹によって、表流水の水みちができ、さらなる土壌流亡が懸念される状態である。
- ・主尾根上の古墳では、人の立ち入りによって遺構（石室）と知らずに上を直接歩くことによって、破損、劣化が懸念される。



草刈後の 58 号墳



石室内から生える樹木



5 号墳の墳丘上部にある
柿畑石積みの跡



58 号墳石室内部



58 号墳の石の表面。
剥離した痕跡



あずまや
東屋整備時の造成で、墳丘の一部が
削られている可能性がある古墳

(7) 現状の保存管理内容等

- ・現在古墳が確認されている場所のほとんどが私有地であり、私有地との境界部に立ち入り禁止のサインが設置されているほかは、特に保存管理は行われていない。
- ・船来山古墳群の重要な古墳の一つである赤彩古墳の分布する O 支群周辺については、講座や見学会などに合わせて実施されるボランティアによる草刈が年に 1~2 回行われている程度で、毎年夏前には古墳が全く見えなくなるほどの草木、ツルに覆われる状態である。



私有地境界部の立ち入り禁止サイン



O 支群 58 号墳周辺の草繁茂の状況
(草刈ボランティアによる作業)

(8) 船来山古墳群の解説施設整備状況

- ・古墳周辺には、船来山古墳群や調査された古墳についての解説板が整備されている。



「船来山古墳群」についての解説板



「船来山 62 号墳」についての解説板



「船来山 81 号墳」についての解説板

3 調査結果の分析

船来山古墳群は、現在確認されている 290 基のうち 216 基が発掘調査され、研究・分析が進められている。発掘調査の成果により明らかになった後期古墳、特に 6 世紀後半から終末期の爆発的な古墳の築造は、古墳全体の約 70% を占め、本古墳群を特徴づける。

発掘調査に先立ち、今から約 50 年前の昭和 42 年（1967）には、船来山 24 号墳が出土し、前期古墳の存在が早くから知られていた。船来山古墳群は、古墳の数の圧倒的な多さと、前期古墳と同じ墓域に後期古墳が連綿と築造される特徴がある。

平成 25 年からは、未調査の前方後円墳を中心に、詳細な分布調査が実施され、前期古墳の時代の様子が明らかになってきたところである。これまでの調査で本古墳群について明らかになってきた点について以下に整理する。

【全体構成】

古墳の数の圧倒的な数の多さ、濃尾平野が一望できる独立丘陵に、290 基もの古墳が群集した大古墳群である。

古墳時代各時代で墓域を変えるわけではなく、同一丘陵上に各時代の古墳が連綿と築かれる。前期古墳が主尾根上の西端から東端まで連綿と築かれた後、中期古墳もごくわずかが築造される。後期になると主尾根やその斜面に多数の古墳が築造される。

主尾根上に前期古墳が築かれた後、古墳時代後期に前期古墳と同じ尾根から中腹、山裾に至るまで密集して築造される。後期古墳は、全体の約 70% を占める。

【前期古墳】

3 世紀からの前期古墳、墳丘墓が 20 基、方形周溝墓、土坑墓を含めれば 23 基は存在する。

後漢鏡を含む鏡 5 面、銅鏃、鉄剣、鉄刀など豪華な多数の副葬品が出土した 24 号墳がある。

- ・ 4 世紀後半から 5 世紀の可能性が高いと考えられており、古墳時代前期から中期への過渡期の副葬品の特徴が見られる。
- ・ 豪華な副葬品にもかかわらず、前方後円墳ではなく円墳と推定されており、被葬者像について検討されている。

墳長約 65m の前方後円墳船来山 5 号墳に代表されるように首長墓がある。

- ・ 5 号墳は三角点付近に位置し、規模だけでなく眺望もすぐれ、首長墓にふさわしい場所に立地している。
- ・ 5 号墳には、畿内中央政権とのかかわりを裏付ける「渡り土手」の可能性が指摘されている（広瀬 2015）。
- ・ 船来山山頂から西方面の前期古墳には、前方部と後円部の比高差が大きい特徴があり、前期の中でも古相の様相を示す（中井 2015）。
- ・ 船来山山頂から西方面の前期古墳は、東方面に比べると墳丘の残りが良く、様相が違ふという特徴がある。

複数の首長が船来山を共同墓域としていた

- ・ 通常一つの墓域（丘陵）に、一つの首長墓系譜を形成するところを、ここでは 2～3 の首長が墓域を共有していた可能性が分かってきた。
- ・ 尾根の西端から東端まで、連綿と前期古墳が築造されている。同一丘陵で墓域を限定するわけではないようである。

同一丘陵上の尾根上に、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳など異なる墳形が築造されている。

- ・ 船来山山頂から東方面には前方後円墳、円墳が多いのに比べ、西方面に伸びる主尾根上には、方墳を基調とする墳墓が展開している（中井 2015）。
- ・ 墳形の違いが、複数の首長の関係性を表している可能性がある。

前期の古墳は、単なる墳墓というだけでなく、政治性が強く現れた視覚的なモニュメントとしての役割が大きい。

古墳時代初期のものとして、八幡山中腹付近（赤彩古墳周辺、O支群）に方形周溝墓、西端の山麓裾部に土坑墓が確認されている。

【中期古墳】

前期に比べると激減し、築造場所も限定される傾向にある。

- ・本巢市側では現在のところ、81号墳、68号墳等3基確認されている。いずれの古墳も、船来山中央の仮称弥勒寺谷支群にのみ確認されている。

【後期古墳】

小型円墳が密集した群集墳が展開する（5世紀末から7世紀後半まで）。

- ・直径数10mの小型墳丘に横穴式石室を構築したもので、前方後円墳などの首長墓は見られない。
- ・横穴式石室は、船来山の地盤の砂岩を切り出して積み上げたもので、墳長5～7m程度のものである。中には19号墳（O支群）のように、巨大な岩塊を鏡石に見立てて構築された珍しい例もある。
- ・墳長が7m近いものはほぼ6世紀代の古墳であり、7世紀に入ると小型化する傾向にある。
- ・畿内で見られるような、巨石墳や切石造りは見られない（奈良県石舞台古墳の天井石は約77トン）（広瀬2015）。

広域に及ぶ集落の有力家族層（経済力・労働力がある一族）が船来山を共同墓域としていた可能性

- ・後期の間に築造された古墳数や周辺集落遺跡の関係から考えると、遠隔地から古墳造りに通ってきている可能性が指摘されている。船来山古墳群は「村の墓地」よりは、「山の墓地」に近い（菱田2013）。

6世紀代（第3期）には、赤彩古墳に代表される豪華な副葬品を伴う古墳が同一支群内（O支群）に築造された。

横穴式石室の形態は極めてバラエティに富み、竪穴系横口式石室、横穴式石室の無袖式・両袖式・片袖式など多彩である。

- ・同一支群内で、同一の石室形式がまとまっているわけではなく、多彩な石室が混在。
- ・初期の横穴式石室は、前期古墳を契機として造営が始まっている可能性があり、ほとんどが竪穴系横口式石室である。
- ・竪穴系横口式石室は7世紀代まで継続せず、6世紀後半からは横穴式石室の両袖式・無袖式が多数を占める。
- ・6世紀後半から7世紀代には、背後に掘割を有する古墳が増加する。
- ・6世紀前半に比べると、6世紀後半から7世紀の古墳は、小型化していく傾向にある。
- ・2mを超える掘方をもつ構築方法は、他地域ではあまり見られない。「船来山型」と呼ばれるべき特異なものである。

通常丘陵の中腹や裾部に作られる後期古墳が、尾根上の前期古墳に隣接して造られた支群がある。

- ・前期古墳を契機として、支群形成が行われた可能性がある（白石2000）。

G支群：前方後円墳26号墳-後期古墳199号墳、210号墳等8基

前期古墳262号墳-後期古墳203号墳、205号墳等

Q支群：前方後円墳98号墳-後期古墳191号墳、194号墳等

R支群：前期古墳99号墳-後期古墳184号墳、185号墳、188号墳等

- ・前期古墳に隣接して造られた後期古墳は、前期古墳の後円部墳頂などには造られず、くびれ部周辺に造られている。

（前期の首長との関係性や、自分たちの祖先との関係性を主張することの表れではないかと考えられている）

- ・前期古墳に隣接して後期古墳が造られた様相は、岐阜県内には例が無く、長野県千曲市の森將軍塚古墳とくびれ部周辺に築造された後期古墳に類似している。

長期にわたって継続的に造営される支群と、短期間で終了する支群等、造営期間が支群によって差がある可能性がある。

- ・多くの支群が、7世紀中頃に築造を終了し、後は追葬する。

- ・ O支群では、5世紀末から造営が始まり、7世紀後半に至るまで新たに古墳が築造され続ける。

【副葬品】

（前期古墳）

大変豪華な副葬品が出土した船来山 24 号墳がある

- ・ 船来山 24 号墳の鏡のうち仿製鏡は、デザイン、製作技術などから、大和盆地北部の政治勢力と関連が深いことが指摘されている（林 2016）。
- ・ 勾玉、管玉のサイズが非常に大きいという特徴がある。

鏡などの「威信財」、「権力財（武器・武具）」、「生産財（農具など）」が副葬される

- ・ 98 号墳の方形板革綴短甲など、下賜されたと考えられる武具が出土している。
- ・ 99 号墳、37 号墳など、鉋の副葬が多い。
- ・ 262 号墳等、初期から鉄の農耕具が副葬される。

（後期古墳）

前期古墳に見られた「威信財」、「権力財」、「生産財」に加え、「生活財（須恵器、土師器）」が副葬されるようになる。

- ・ 「生活財」は靈魂観（死んだ後も魂が生き続ける）を表すと考えられる。
- ・ 須恵器は、近隣の尾張ではなく、近江、畿内の工人との関係を示唆されている。
- ・ 大量に生活財が副葬されるほか、176 号墳出土角付盃、272 号墳出土把手付盃、121 号墳出土三足壺など、単純な生活財とは考えにくい土器も出土している。

後期の赤彩古墳に代表される、6 世紀代の副葬品の豪華さは、他の古墳群と比べても群を抜いており、葬られた古代豪族の勢力を示している。

- ・ 赤彩古墳のみに出土した雁木玉、トンボ玉
- ・ 29 号墳出土の馬具、武器類、雲母片、272 号墳出土の馬具、装飾大刀
- ・ 103 号墳出土のミニチュア農耕具、雲母片、銅釧等
（東海地方だけでなく、畿内、国内遠隔地や朝鮮半島、中国大陆との関係が示唆されている）
- ・ 29 号墳、103 号墳、150 号墳、151 号墳、178 号墳、271 号墳等豪華な玉類

7 世紀中頃になると、副葬品の数も減少していき、特に玉類の副葬が貧弱になっていく。

以上のような点がこれまで明らかになってきたことであるが、

- ・ 前期に複数の首長が、この丘陵を共同墓域としたのはどうしてか。
- ・ 墳形が円墳と推定されるのに、豪華な副葬品が埋納されたのはなぜか。
- ・ 前方後円墳と前方後方墳、異なる墳形は何を意味するのか
- ・ 中期の首長墓は明瞭ではない。前期の首長墓の続きはどうなったのか。
- ・ 中期の墓域が、ほぼ一か所に限定されるのはなぜか。
- ・ 後期に爆発的に古墳が造営されるのはどうしてか。
- ・ 後期古墳が、前期古墳と同じ墓域（尾根上）を共有するのはなぜか。なぜこの丘陵が選ばれたのか。
- ・ 多様な石室が、同一支群内に混在する理由は何か。
- ・ 後期のうち、6 世紀代に大型の古墳や豪華な副葬品が集中するのはどうしてか。
- ・ 多数の中間層（有力家族層）が生活域から離れてここに墓域を結集させた理由は何か。
- ・ 遠隔地から船来山に墓域を結集させた一方、地元の地方豪族との関係はどうか。地元の集落の動向との関係は。
- ・ 様々な系譜をひく人々がこの船来山に古墳造りに通ってきているのは、自発的な行為か、他律的な意志が働いたのか（中央政権との関係か）。

等、船来山古墳群の動向には、日本古代史の中で課題となっている問題についての解明のヒントが大いにあると考えられる（広瀬 2015）。

船来山において、350 年もの長期にわたり古墳が造られ続けた歴史的背景をさらに明らかにするために、今後も調査研究が進められることが期待される。

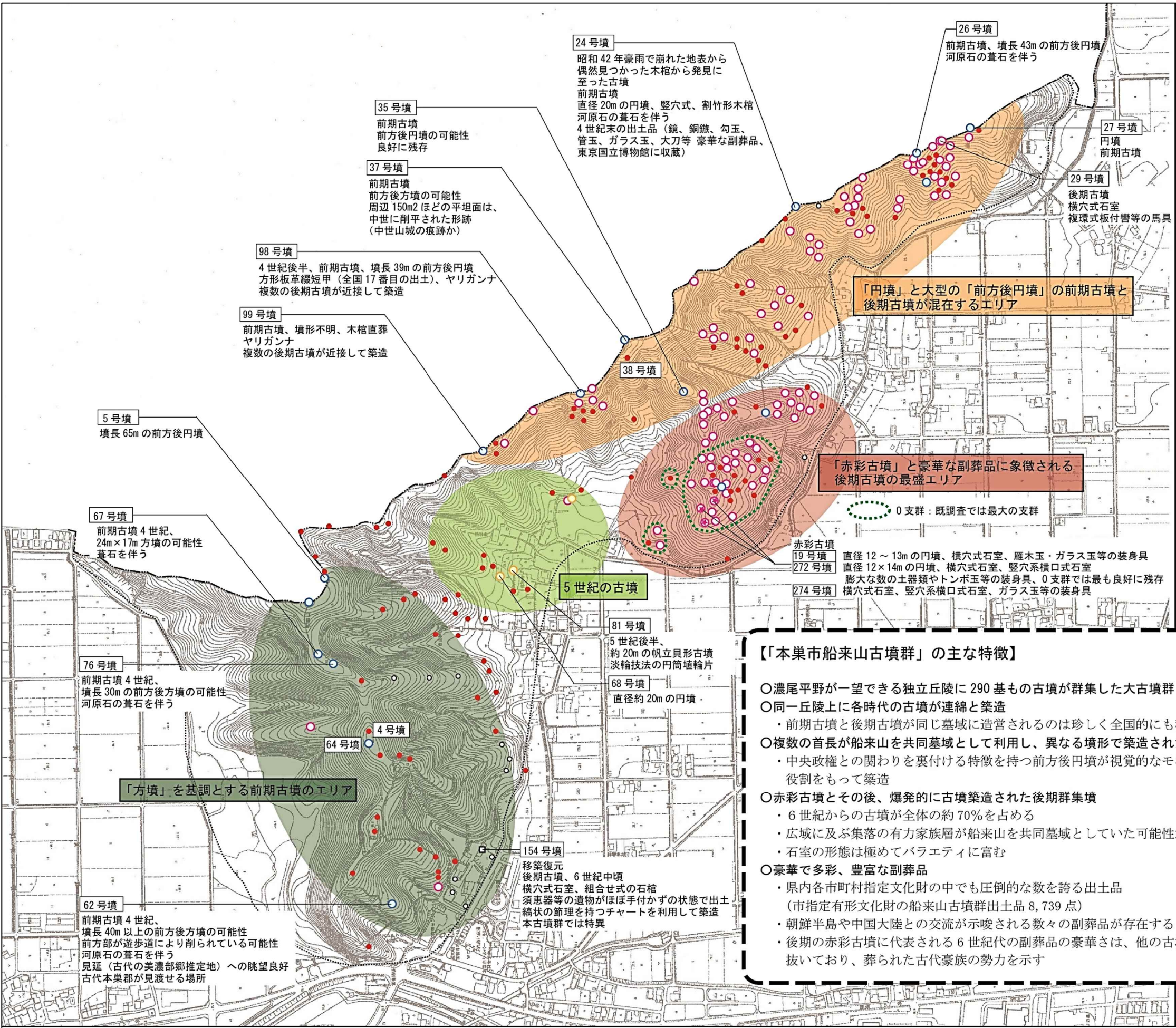
図 2-30 本巣市船来山古墳群の年代別古墳分布と主な特徴

＜凡例＞

- ：前期古墳
(3世紀中頃から4世紀後半)
- ：中期古墳
(4世紀末から5世紀後半)
- ：古墳後・終末期
(5世紀末から7世紀)
- ：年代が推定されていない古墳
- ：消滅もしくは確認できなかった古墳
- ★：赤彩古墳（彩色古墳）

〰〰〰：本巣市船来山古墳群範囲（仮）

※『本巣市詳細遺跡分布調査報告書』（2012、本巣市教育委員会）より船来山古墳群の遺跡範囲をトレース



【「本巣市船来山古墳群」の主な特徴】

- 濃尾平野が一望できる独立丘陵に290基もの古墳が群集した大古墳群（東海地方で最大級）
- 同一丘陵上に各時代の古墳が連続と築造
 - ・前期古墳と後期古墳が同じ墓域に造営されるのは珍しく全国的にも稀有なエリアといえる
- 複数の首長が船来山を共同墓域として利用し、異なる墳形で築造された前期首長墓
 - ・中央政権との関わりを裏付ける特徴を持つ前方後円墳が視覚的なモニュメントとしての役割をもって築造
- 赤彩古墳とその後、爆発的に古墳築造された後期群集墳
 - ・6世紀からの古墳が全体の約70%を占める
 - ・広域に及ぶ集落の有力家族層が船来山を共同墓域としていた可能性が高い
 - ・石室の形態は極めてバラエティに富む
- 豪華で多彩、豊富な副葬品
 - ・県内各市町村指定文化財の中でも圧倒的な数を誇る出土品（市指定有形文化財の船来山古墳群出土品8,739点）
 - ・朝鮮半島や中国大陸との交流が示唆される数々の副葬品が存在する
 - ・後期の赤彩古墳に代表される6世紀代の副葬品の豪華さは、他の古墳群と比較しても群を抜いており、葬られた古代豪族の勢力を示す